2026.4
春・夏
No.122

鴨東通信

思文閣出版

❖日常語のなかの歴史35
かたいみ【方忌み】 ◆山下克明

❖てぃーたいむ
杉戸絵を研究する ◆木下京子 ◆朝日美砂子 ◆松本直子 ◆奥平俊六

エッセイ
皇位継承と「呪詛」 ◆佐藤一希
新任老中のもとで翻弄される家来たち ——「家」が生んだアーカイブズを読み解く ◆大友一雄
二〇年越しの回答 ◆三宅秀和
大唐異韻 ◆中田美絵

❖ミレニアル世代の研究レシピ9
漫画家清水崑の「詩的なあたたかさ」のある政治漫画 ◆入江清佳

❖史料探訪82
光明本尊 ◆髙口柚

杉戸絵の研究

木下京子（多摩美術大学教授・フィラデルフィア美術館学芸員）編

4月刊行

A4判上製・四一八頁／
定価 二二、〇〇〇円

近世の城郭御殿や神社仏閣において、杉戸は権力空間や宗教空間を荘厳する不可欠な建具であった。「廃城令」以後、解体された御殿の襖や杉戸、欄間などの建築部材は海外へと流出し、売立てられ、アメリカの美術館に収蔵されている杉戸の中には、葵紋が刻まれた引手を持つものが複数点存在する。一方、日本国内に現存する杉戸は保存と評価の難しさから、杉戸絵が障壁画研究において副次的に取り上げられることはあっても、研究対象の主体として扱われることはほとんどなかった。

本書は、城郭御殿を代表する名古屋城と二条城の杉戸をはじめ、徳川家ゆかりの寺院や霊廟に伝来する杉戸、明治宮殿の杉戸、さらには在米美術館所蔵の杉戸にまで視野を広げ、国内外に分散する杉戸の実態を総合的に分析する。豊富なカラー図版と論文とコラムを通じて、これまで周縁化されてきた杉戸絵研究の発展を目指すものである。

【目次】

はじめに

【図版篇】

鶴林寺本堂の杉戸絵／西教寺客殿の杉戸絵／名古屋城本丸御殿の杉戸絵（名古屋城総合事務所蔵）／伝名古屋城二之丸御殿の杉戸絵（現衝立装、個人蔵）／相応寺の杉戸絵（相応寺蔵、岡崎市蔵）／建中寺の杉戸絵／名古屋城竹長押茶屋の杉戸絵（名古屋城二之丸御殿桜之間の杉戸絵、個人蔵）／伝西浜御殿の杉戸絵（名古屋市博物館蔵、遍照院蔵）／名古屋離宮の杉戸（名古屋城総合事務所蔵）／二条城二之丸御殿の杉戸絵（京都市元離宮二条城事務所蔵）／養源院本堂の杉戸の杉戸絵／喜多院客殿の杉戸絵／日光東照宮の杉戸絵／（参考）「日光山御宮之図」部分（大阪城天守閣蔵）／輪王寺大猷院の羽目板絵／紀州御殿の杉戸絵（大阪城天守閣蔵）／和歌山城の杉戸絵（和歌山城整備企画課蔵）／イザベラ・ガードナー美術館蔵の杉戸絵／ボストン美術館蔵の杉戸絵／フィラデルフィア美術館蔵の杉戸絵／（参考）東京国立博物館蔵「江戸城障壁画下絵」

【論文篇】

木下京子「序論　杉戸と杉戸絵の成立とその展開」
［コラム］久保智康「近世の飾金具」
朝日美砂子「名古屋城下の杉戸絵」
［コラム］朝日美砂子「名古屋城の杉戸絵―指定と保存・修理と現場―」
［コラム］朝日美砂子「旧国宝　名古屋離宮の杉戸―引手を手掛りに―」
松本直子「二条城二之丸御殿杉戸絵について―徳川幕府の城郭御殿杉戸絵との比較から―」
［コラム］松本直子「二条城二之丸御殿杉戸絵の修理と模写について」
［コラム］松本直子「二条城本丸御殿（旧桂宮御殿）の杉戸絵」
奥平俊六「宗達と板絵の画家―養源院の杉戸絵はどのように描かれたのか―」
［コラム］奥平俊六「喜多院障壁画と土佐一得」
山澤学「江戸狩野派杉戸絵と徳川将軍家霊廟拝殿の荘厳」
五十嵐公一「明治宮殿杉戸絵―『皇居御造営誌』『皇居造営録』から分かること―」
木下京子「アメリカに流出した城郭御殿と寺院の杉戸」
［コラム］ペギー・オリー、ケイト・ダフィー、木下京子「フィラデルフィア美術館所蔵杉戸の杉板について」
謝辞／あとがき／執筆者略歴／収録杉戸絵一覧／英文目次／要旨

表示価格は税込

日常語のなかで、歴史的語源やエピソードを取り上げ、研究者が専門的視野からご紹介します。

日常語のなかの歴史35

かたいみ〈方忌み〉

方忌みとは、ある方角に所在する方位神を避ける行為をいう。

藤原行成の『権記』長保元年（九九九）七月二五日条に「方忌有るに依りて、御物忌に籠らず」（方忌みにより内裏の物忌みに参籠しなかった）とあるなど、平安貴族たちの日記に頻繁に見え、それ以降も広く社会に影響した風習であった。

避けるべき方位神はさまざまで、貴族が用いた具注暦冒頭にみえる大歳・大将軍・歳徳・大陰などの九方位神のほか天一・金神等があり、おのおの年の十二支により所在をかえた。庶民が用いた南都暦や三嶋暦、京都の大経師暦などの仮名暦では、暦首に歳徳と大将軍の所在方位が大書される例が多い。中近世ではこの二神が重視されたことが知られるが、それは吉凶を代表する方位だったからである。

歳徳は万事を吉とする善神で、南北朝頃成立の『簠簋内伝金烏玉兎集』では牛頭天王の妻、八王子（八将神）の母で諸事に用いるべき吉方とされ、正月の初詣の恵方であり、現代でも恵方巻の方位神として知られている。大将軍神は万事を凶とする方位として恐れられ、方違えが行われ、また厄難を除くため人々は各地に大将軍社を建立した。なかでも京都市上京区の大将軍八神社は、平安後期・鎌倉時代の神像八〇躰を伝え知られている。

これら暦の方位神に対し、一定の凶方として畏怖されたのは鬼門である。鬼門は中国古代の『山海経』などの伝承に出て多数の鬼神が出入りする東北・丑寅方の門で、それが土地・家相の吉凶を説く『宅経』などにとられ、日本に伝わり平安後期の『作庭記』には魔縁が入るのでその方に石を立ててはならないとある。平安末頃には比叡山延暦寺は皇都の丑寅鬼門封じのため建立されたとの伝承を生じ、また江戸時代には天海の主張で江戸城の鬼門封じとして東叡山寛永寺が建立され、近世再建の京都御所にも東北に隅切りがあり、これを「猿ヶ辻」と称している。貞享の改暦前後から仮名暦は暦首に年神方位図を載せ、歳徳・八将神とともに鬼門方を記している。この辺りから鬼門は民衆にも定着し、建築関係などの場面で鬼門・大将軍神の方忌みは現代に伝えられている。

（山下克明・大東文化大学東洋研究所兼任研究員）

てぃーたいむ

杉戸絵を研究する

木下京子（多摩美術大学教授、フィラデルフィア美術館学芸員）
朝日美砂子（金城大学等非常勤講師、前・名古屋城調査研究センター学芸員）
松本直子（京都市元離宮二条城事務所学芸員）
奥平俊六（大阪大学名誉教授）

杉戸絵を主題として据えた初めての研究書『杉戸絵の研究』を編集された木下京子さんと、執筆されたお三方に、杉戸絵を研究することの意義や魅力についてお話を聞きました。

■アメリカの収蔵庫から始まった研究

――プロジェクトを始めたきっかけについて教えてください。

木下：私は一九九五年からフィラデルフィア美術館に勤務しています。館蔵品の中には仏像や絵画など「廃仏毀釈」や「廃城令」が契機となって日本から流出したと思われる美術品がありますが、驚いたことに建築部材も相当数あり、収蔵庫に眠ったままとなっていました。その中に杉戸が二〇枚あったのですが、引手の金具には葵の御紋が彫られており、日本のどの城郭御殿、もしくはお寺から流出したものなのか、ずっと気になってはいましたが、なかなか調べる機会を持てませんでした。

きっかけとなったのは、二〇一五年に開催した狩野派特別展(Ink and Gold: Arts of the Kano School)です。当館および在米他館の狩野派の作品を調査していく中で、杉戸にもようやく向き合うことが出来ましたが、剝落が進んでおり、表面に塗布された溶剤などについて、名古屋城さん・二条城さんなど日本の機関にご相談するようになりました。狩野派研究を牽引されていた大阪芸術大の五十嵐公一さんや、引手の金具について随一の知識を持っていた京都国立博物館の金工担当・久保智康さん（二〇二四年ご逝去）にも色々と教えていただく中で、今回の本の執筆陣の顔ぶれが揃っていきました。そして、杉戸を理解するには城郭御殿だけではなく

木下氏

霊廟もみなくてはいけませんから、東照宮さんや輪王寺さん・養源院さんを長年研究されてきた筑波大の山澤学さんにも加わっていただきました。

奥平：教え子である木下さんに研究の相談を受けるなかで私もこのプロジェクトに加わりましたが、障壁画研究者として、養源院の杉戸絵の異質性については長い間考えてきました。俵屋宗達が描いた白象などの絵で、良く知られていますが謎が多い。今回、国内外の様々な杉戸をみせていただく中で、宗達杉戸の異質さを改めて実感し、その成り立ちについて本の中で仮説を論じました。杉戸はとにかく大きくて重くて傷みも激しいですから誰もやりたがらなかったのですが、木下さんに巻き込んでいただいたおかげで、色々なことがわかりました。

――今回、多数の杉戸を所蔵する城郭御殿の代表である名古屋城さんと二条城さんが協力してくださいました。

朝日：名古屋城下は戦争で大きな被害を受けましたが、江戸前期から後期にかけての杉戸絵が意外にもたくさん残っています。とくに名古屋城の本丸御殿は、江戸時代から昭和のはじめまで将軍や皇室だけが使える建物とされてきたので、杉戸絵も大切に保管されてきました。第二次世界大戦の末期には御殿から取り外され疎開されており、御殿が空襲で全焼したのにもかかわらず奇跡的に残りました。

松本：大事に守られた結果として、名古屋城さんの杉戸は状態が良いですね。二条城は、観覧の妨げとなるもの以外については、平成の中頃まで、杉戸を公開し続けており、修理も対症療法的だったので、変色など全体的な傷みが激しいです。二〇〇六年から城内の文化財について本格的な修理事業を開始しましたが、同じ障壁画でも脆弱な紙本の方が優先され、比較的堅牢な杉戸は後回しで収蔵庫に押し込められていたことが気にかかっていました。

■繊細さと力強さ

――杉戸絵の特徴について教えてください。

奥平：日本の絵画は掛け軸や屏風のように、基本的に巻いたり畳んだりして持ち運べるものが多いのですが、障壁画の中でも重くて巨大な杉戸は「持ち運べない」絵画の最たるものです。

朝日：建具という点では、襖も同じです。大きく異なるのは材質が木で、木の収縮により顔料が不安定になっていて。わずかな振動でもハラハラと落ちてしまいます。不安定さの面では、紙本や絹本とは全然違います。

松本：板は割れると元には戻せませんから、城内の建物から別の建物に移動させるだけでも、職員は毎回緊張します。板の周りにある漆塗の框もゆるんでいるものは、扱いが難しいです。

框には埃がたまりやすいので、雑巾掛けをしたのか、框上がこすられて顔料が無くなっている杉戸絵も多いですね。

木下：朝日さんがお寺での調査の時に「お掃除セット」を持って

奥平氏

きてくださるのは助かりました！　杉戸は日常の中にありますから、上には蜘蛛の巣が張っていて、面には埃が吸い付いていることもあります。

朝日：掃除といっても筆でそっと埃を落とす程度です。それと、名古屋城の杉戸は、展覧会に貸し出したこともありましたが、文化庁のご提案もあって、ある時期から「門外不出」としました。

――修復の方法は確立されているのでしょうか。

松本：処置としては「クリーニング」と「剝落止め」の二つですが、保存修復を専門にされている東京文化財研究所の早川典子さんによると、板絵は現場ごとに状態が異なる難しさがあるそうです。素材も制作年代も違いますし、日の当たり具合など環境もそれぞれ違いますから、判断は簡単ではないです。

――過去の修復における判断は、後にどう影響したのでしょうか。

松本：功と罪、両面あったように感じます。当時の担当者がその時考えられる最善の策を尽くしてくれた結果として顔料が残ったということもあります。一方で、使用した薬剤が予期せぬ変化を起こしていることもありますし、そもそも何の薬剤を使ったのかわからないものもあります。

朝日：名古屋城の場合は、昭和四〇年代に丁寧にアクリル樹脂が塗布されていて弊害も少なく、「功」の面が大きいと感じます。

松本：二条城では、修理以外に昭和四七年から障壁画の模写事業を行っています。国宝の御殿にはめるため、古色をつけた模写です。最初にとりかかった黒書院については、杉戸絵の模写も完了しており、御殿で展示しています。杉戸絵一五六面すべてを模写する計画ですが、現在は杉板の確保が難しくなっているので、思うように進められていません。

朝日：名古屋城では、戦災で焼けた本丸御殿を新築するにあたり障壁画の復元模写という手法が選択されました。描かれた当初の鮮やかな色を再現するもので、林功・加藤純子両先生のご指導の下、愛知県立芸術大学の卒業生が制作を担当しています。

■「現場の判断」に守られた杉戸

奥平：名古屋城は戦争でだいぶ焼けましたが、杉戸絵などの障壁画を守り抜いたのは「凄い」としか言いようがないですね。

朝日：名古屋城本丸御殿と障壁画は戦前に国宝に指定されましたが、杉戸絵と天井画は指定外でした。戦火が激しくなり、国宝絵画を疎開させることになったのですが、現場の判断で、未指定品も含めて動かせるものは全て、名古屋城の中の倉庫や櫓に運び込んだのです。

松本：二条城でも、昭和二〇年の春頃から、障壁画を城内の土蔵に移動させていたのですが、名古屋城さんがその年の五月に燃えてしまったのがきっかけとなったのでしょうか、慌てて七月に疎開させたようです。やはり外せるものは欄間彫刻まで外して、汽車に乗せ、トラックに乗せ、滋賀の山奥にまで運んで行った。

朝日：名古屋城では昭和三四年に大・小天守が鉄筋で再建され、杉戸絵は小天守で保管されました。展示の際は重い杉戸絵を屋根のない外階段で大天守へ運ぶしかなく、杉戸絵には受難の時期でしたが、後に西の丸御蔵城宝館が整備されようやく安住の地を得ました。

■圧倒的な現実感

朝日：名古屋城に来てくださるお客様に、杉戸は人気なんですよ。建具としての迫力があって、框の下に戸車がはまっているなど、構造的な面白さもありますから。

奥平：板が持つ力というのは、日本人だけでなく海外の方にもわかりやすいのではないでしょうか。誰が見ても大きくて重量感があって、強いインパクトを与える。海外では、オリエンタルなものに対する関心もありますね。杉戸絵には、はまっていた空間を想像させる力がある。

朝日：生活の中で開け閉めされていたわけですから当然、傷がたくさんあります。掛け軸は修理すればシワやシミもある程度とれますけど、杉戸は一度傷が付いたら未来永劫残ります。逆に、引手や打掛（鍵）などの金具は取れてなくなっていても、弧を描くような擦れた跡があれば鍵の跡なので、跡のある奥側になりますし、お寺ではなく御殿にあったものかなどと推測もできます。これは襖絵でも同じで、建具として使われていた時の記憶を宿していると捉えれば、傷すらも魅力と言って良いんじゃないでしょうか。

朝日氏

奥平：建築も同じですけど、木は古色が付くから、古くなることが、ボロくなる・魅力がなくなることを、単純に意味しない。木そのものが持つ力の強さ、大きさ・重さから来る存在感は、バーチャルな空間の中では絶対に感じられないものですね。ＡＩが出力する文章も画像もなめらかですけど、そういった夾雑物が抜け落ちた「ツルツル」の世界とは真逆の位置に、杉戸絵はある。

木下：フィラデルフィア美術館の日本美術ギャラリーで一度、杉戸を四面、横に並べて展示したことがあります。この時は床から少し高い所に敷居を作り、そこに杉戸を設置して、全体に無反射アクリル板のカバーを付けました。筆線や顔料など杉戸絵の図像や引手の細かい装飾だけではなく、背景の杉板の木目もよく見えるので、どのお客様も食い入るようにご覧になり、大人気でした。

一方、狩野派特別展を開催した時は、日本の美術館と同様に、奥行きのある展示ケースを会場内に設置しそこに杉戸二面を展示したのですが、杉戸そのものを間近でお見せすることができず、杉戸絵の醍醐味をお伝えしきれなかったという反省がありました。杉戸絵はやはり、名古屋城や二条城、お寺様や東照宮様のように、建物の中、あるいは美術館であっても、間近で見て木目などの木の風合いとともに絵を楽しむのが一番だと思います。

■木目と日本人

木下：アメリカの人は、あんなに木目がある所に絵を描くということに驚くようです。欧米では絵画と言えばテンペラ画・油絵です。フィラデルフィア美術館の修復担当者は杉戸をみて、年輪がきちんと対照になるように組み合わされている（ブックマッチ）珍しさに感動していました。

奥平：古い絵巻物に「画中画」として描かれている杉戸を見ると、異様なほど木目にこだわっていますよね。

全員：そうそう（笑）。

朝日：杉戸絵を過小評価しているのは現代の我々だけなのかもしれませんね。必ずしも美しい木目ではない、敢えて節があるものを選んだと思われる杉戸絵があり、昔はそれも見どころとしてとらえたのでしょう。それに、木目の年輪部分は固く細胞がつまっていますが、年輪と年輪の間はつまっておらず柔らかいので、年月がたつと間の部分が乾燥してへこんできます。板の表面に凹凸ができる訳で、顔料はひっぱられ、木目に沿って縞状に割れて落ちてしまう。そんな素材にまで絵を描きたいという、日本美術の豊かさがここからもわかります。

松本：木目のそろっている良い板は御殿の表側に使い、そうでないものは裏側に使っているのが明らかですが、中には「何でこんなものを使ったの？」と疑問に思う程、すごく奇妙な木目の板もありますね。

朝日：名古屋城では、離宮期（明治二六年～昭和五年）に絵のない杉戸を宮内省が作っています。そのうち明治期の作と考えられる杉戸は、木材としては一級品なのでしょうが、あまりにも木目が揃い過ぎていて逆に面白くありません。しかし大正期の杉戸になると、良材とはいいがたい板が使われ、剝目も多くなる。引手に着目すると、明治期末の引手には葵紋が彫られていますが、大正期になると菊紋に変わります。宮内省は、明治期には城郭建築として御殿を大切にしていましたが、その意識が変化していったのでしょうね。離宮期の杉戸には絵が描かれていませんが、近代史の証人として、今回、新規撮影して掲載しました。これも、戦時中に現場の担当者が、無地の板戸まで疎開させたから残ったものです。

■これから始まる杉戸絵研究

朝日：名古屋城本丸御殿以外ですと、杉戸は所有が移りやすく、どこにどのようにはまっていたか、わからない物が多いです。襖などは紙本ですから使っている内に破けてしまいますが、板は丈夫なので捨てられずに何代にもわたって使われ続ける。

松本：御所やお城から下賜されたものを切り詰めて、民家で使っておられるケースがあります。

奥平：引手に紋が入っていればステータスになりますからね。城下に眠っている杉戸がまだまだいっぱいあるはず。

木下：アメリカでオークションに掛けられたものの中で、額装されている杉戸絵もあります。オリエンタリズムやジャポニズムの影響もあり、お屋敷での見栄えも良かったと思います。

――美術史の研究対象としてはいかがでしょうか。

木下：杉戸絵研究は、障壁画研究の一部として副次的な存在でし

た。これまでお話してきたように、扱いも難しいですから、そもそも杉戸絵だけで展覧会を実施することが難しいと思います。なにせ大きくて重いですから収蔵庫から出せないこともあります。美術品ではなく建具（建築）に分類されていることもあり、どこにあるかわからないものもたくさんあるはずです。

松本：御殿の障壁画は基本的に落款（署名）がないですし、江戸時代の史料をみても、杉戸絵だけ情報が少ないものが多いです。現代でも、書籍などで公刊されている写真も少ないですね。

木下：絵具が落ちやすいですから、上から塗り重ねられて当初と全く違う絵になっているものまであります。このような複合的な理由で、杉戸を研究対象の主体に据えることは難しかったのだと思います。

――今回の調査で新たに気づいたことはありますか。

奥平：私は同時に絵馬の調査もしていたのですが、絵馬も板絵ですし、重要な奉納品であっても落款が無かったり、あっても無名の画家で誰が描いたかわからないものが多いという点では杉戸と共通します。養源院の宗達杉戸の、主題を枠いっぱいに描くという点や、堀り塗りの太い線で輪郭を引く所は、同時代の大絵馬を参照したのだろうなということは、杉戸と絵馬を両方調査したから気づいたことです。

松本氏

――本を刊行することの意義について教えてください。

松本：二条城はこれから杉戸絵一五六面の修理をしていく予定です。途方もない時間がかかりますが、この本が出ることによって皆様にその意義を理解していただけると有難いです。それから、今回の本では引手金具も重要な存在として積極的に紹介しているのですが、久保智康先生が亡くなられて、引手金具研究を継ぐ方がおられないですね。

奥平：この本を読んで、引手にも興味をもって研究を志してくれる若い方が出てくることを願います。木材などの年代測定技術も相当進化していますから、杉戸についてはこれから新発見がたくさん出来るんじゃないかな。

木下：本書では取り上げることが叶いませんでしたが、京都と名古屋以外の複数のお城と地元の博物館に調査にお伺いさせていただきました。数多くの興味深い杉戸が保存されています。

朝日：全国のお寺にはまだよく知られていない杉戸がたくさんありますから、知っていただくことで文化財指定がなされ、保護の対象になることを願います。

木下：本の中でアメリカ東海岸の美術館の事例を複数紹介しましたが、欧米に流出した杉戸もまだあるはず。これがきっかけとなって、海外でも興味を持つ方が増えると嬉しいです。

奥平：この本は「第一歩」であって、完結じゃないですね。

木下：「こんな本は二度と出せないだろう」とは言いつつも……、いつか「番外編」「続編」をやらないといけないですね！

（二〇二六年二月一九日　於・思文閣本社）

皇位継承と「呪詛」

佐藤一希（さとう かずき）

「呪詛」と聞くと、何を思い浮かべるだろうか。語義的な意味では「呪い」と同義であり、『日本国語大辞典』には「ある特定の人や物事を激しく憎み、神仏に祈願してそれを害しようとすること」とある。一般的には、ホラー映画などで人形や呪符を用いる行為というイメージもついて回るだろう。日本史学の知見に基づくと、古代の大宝律令「賊盗律」において条文が設けられ、謀反・反逆や殺人・強盗・窃盗とならぶ凶悪犯罪の一つとして、処罰規定が明記されていたことが知られている。

本年二月に上梓した拙著『近世後期の皇位継承と天皇・女院』では、近世後期の皇位継承をめぐり「呪詛」がたびたび問題になっていたことを取り上げた。しかし、拙著の性格上、行論中では「呪詛」をめぐる問題が、朝廷内あるいは幕府との関係にどのように作用したのかという点に議論が収斂しており、当時いかなる行為が「呪詛」とされたのか、十分に論究しえなかった。以下、雑駁ながら、皇位継承をめぐる「呪詛」の内実を紹介したい。

ここで取り上げるのは、安永八年（一七七九）に後桃園天皇が死去した際に流布した呪詛の風聞である。同年一〇月、年始から体調を崩していた後桃園天皇は、禁裏御所にてわずか二一年の短い生涯を終えた。彼には皇子がいなかったことから直系継承の可能性は途絶え、唯一の在位経験者である女帝後桜町上皇の意思を以て、わずか八歳の閑院宮家の王子祐宮が皇嗣に冊立される。

近世には、天皇家に皇嗣たり得る皇子が存在しない場合、皇統の備えとなる家として、伏見宮・京極宮・有栖川宮・閑院宮のいわゆる「四親王家」が存在した。しかしながら、当時は京極宮家が当主不在、有栖川宮家には適齢の王子が存在せず、閑院宮家と伏見宮家のみが皇嗣を冊立しうる家となっていた。

こうした状況のなか、朝廷周辺や京都の町々では、伏見宮家の当主邦頼親王が山伏（修験者）に依頼した「呪詛」によって、後桃園天皇が死去したとの風聞がまことしやかに流れていた。複数の堂上公家の日記に関連する記事が確認されるが、そのうちの一人柳原紀光によると、その年の六月頃から、邦頼親王は薬師院と号する伏見に居住していた山伏に、病気調伏の御祈を執り行わせていた。そして、伏見宮家で実施された護摩行が結願した後、御所に函三合が献上され、そのうち二合は床下の地中に埋められ、残

りの一合は井戸に沈められたという。その後、九月に入ると天皇の体調が悪化したことを受けて、陰陽寮の幸徳井保暠や神祇伯の白川資顕、比叡山延暦寺の千日行者から「呪詛」の疑いが言上され、地中に埋められた函二合は取り除かれたものの、井戸に沈められた函一合は発見に至らなかった。前関白の近衛内前は、地中に埋められた函の中身を調査し、一合目には水のみが入っており、もう一合には梵字の記された青石と灰が盛られた土器が入っていたことを確認した。だが、これらの効力を真言・天台の僧侶に諮問したものの、詳しいことはわからなかったらしい。

陰陽師に神祇伯、さらには顕密僧までもが登場し、まさに宗教者の総出で、事態の解明に動いた様相が見受けられ興味深いが、顕密僧への諮問は、寺院側の史料からも詳細を知りうる。天台宗寺門派の総本山園城寺が所蔵する「園城寺文書」によると、地中から掘り出された函二合は京都町奉行所へ移管され、武家による審議がなされていた。その過程で、京都町奉行らも延暦寺・園城寺の高僧を召喚して証拠品の検分を行ったものの、彼らを以てしても、明確な証拠と断言することはできなかったのである。

文献史学の立場からは、薬師院の祈禱に「呪詛」の疑いがかけられ問題になったこと、さらにどのような行為あるいは物品に疑いがかけられたのかがわかる貴重な事例といえる。だが、「呪詛」なるものの効果を科学的かつ合理的に説明することや、それにより天皇が死去したことの証明が困難であることは言うまでもない。実際に当時の朝幕双方の詮議を以てしても、決定的な証拠が見つかることはなく、薬師院が処罰されることもなかった。

むしろ本事例から詳らかになるのは、伏見宮家が皇位継承者を輩出しうる家として、公家や宗教者、町中の人びとに至るまで認識されていたという事実であろう。だがその反面、朝廷上層部に限ると、桜町天皇以来の皇位継承の方針をふまえ、当時の皇統に血縁的に最も近いという論理を以て、閑院宮家から皇嗣を冊立することは、半ば自明視されていた。そもそも伏見宮家は、一八世紀中葉に後桃園の叔父にあたる貞行親王を養子として当主に迎えたことで、一時的ではあるが天皇家に最も近しい家となっていた。だが、貞行親王の早世、さらにその跡継ぎに天皇皇子ではなく、伏見宮家の血統を有する王子を据えたことで、両家の血縁関係は、男系の観点では中世から交わらない遠い関係性へと回帰する。

伏見宮家の動きからは、現皇統に近い血統を維持するよりも、室町時代以来の「崇光流」を維持しようとする意識が強固に認められ、両者は併存しうる性格にない。同家の王子が皇位の適格性を欠くことは、邦頼親王自身も重々承知していたはずである。だが、朝廷上層部の認識が市井に共有されるはずもなく、一般には伏見宮家を皇位継承の対抗馬と見做す風潮が存在したため、「呪詛」の疑いは世相を賑わせた。邦頼もさぞかし当惑したことだろう。

近世の伏見宮家を源流とする宮家に属する人々は、戦後に皇籍を離脱して一般国民となったものの、近年では、現代そして未来の皇位継承問題をめぐり、様々な場面・媒体で盛んに取り上げられている。当事者の意向や思惑を抜きにして、周囲が騒ぎ立てる構図は今も昔も変わりない、といったところだろうか。

（名古屋大学准教授）

新任老中のもとで翻弄される家来たち

――「家」が生んだアーカイブズを読み解く

大友一雄

四月といえば、どの職場でも新しい顔ぶれが加わる季節である。研修に追われ、慣れない仕事に戸惑い、やがては葛藤を抱えながらも職務に向き合っていく――そんな姿は現代のオフィスに限らない。江戸時代、幕府の中枢である老中職においても、似たような「新人の季節」があった。松代藩真田家文書を手がかりに、新任老中がどのように執務体制を整えていったのか探ってみたい。

松代藩主・真田幸貫が老中に就任したのは天保一二年（一八四一）六月のこと。松平定信の次男で吉宗の曾孫という血筋ながら、幕府要職の経験はなく、天保改革に絡む異例の抜擢だった。それでも研修は必要で、当時、新任者は現任老中の一人に師範役を依頼し、まさに手取り足取りの指導を受けるのだが、この時は古参老中の水野忠邦が師範役となった。その指導は二度目の月番が終了するまで、半年以上に及ぶのであるが、就任当日、水野がまず命じたのは、真田家江戸藩邸に老中を支える公用方役人を急ぎ配置することである。公用人、案詞奉行、書翰方、広間頭取、部屋番、鎰番、箱番、手留方など総勢五〇名がその日のうちに任命された。翌日には勤務が始まり、役職就任の起請文の提出などの手続きも控えていたため、準備は極めて慌ただしかった。

興味深いのは、師範の指導が老中本人だけでなく、公用方役人にも及んだ点である。公用方役人の存在は、老中機能の一部を担う存在であり、だからこそ師範の指導になったとすべきであろう。彼らは藩主の私的な補佐にとどまるのか、それとも老中制の一角を担うのか――その違いは大きい。これは老中制における藩邸の位置づけにも関わる問題といえる。少なくとも大名の代替わり・御目見・生死・婚礼・参勤交代などのすべては藩邸が受理しており、大名支配に藩邸が深く関係したことは間違いない。したがって、江戸殿中と江戸藩邸との関係を統一的に捉えることが必要である。

また、師範家の類役が真田家の公用方役人を指導することからも想像されるように、この問題は老中役人間の情報ネットワークの構築に関わった。つまり、円滑な情報交流のためには双方の役人配置が同様であることが好ましい。老中役人間の交流も含め、公用方役人が担った業務を老中の機能分析のなかで明確に位置づけることが重要である。

さて、掛りに就いた役人の勤務実態はどのようであったのであろうか。幸貫と家来たちは、師範役に導かれながら慌ただしく体制を整えていったのだが、今回の人事にあたり家来を増員したわけではなかった。すなわち、公用方役人の多くが藩の役職との兼務であった点は見逃せない。本役が公用方で藩職を兼務する者が多かったが、逆のケースもあった。役割ごとに本役・兼帯の就任は統一されるなどの工夫がなされていたが、老中関係の職務が新たに加わるわけであり、過重労働は避けられない。旗本では財務関係の用人を必要に応じて新規に雇用することがみられるが、公用方の役人はすべて家臣団内部で賄われるのであった。

その実態を物語るのが、老中日記の作成や他家日記の書写を担当した手留方による勤務改善の申立書である。手留方は兼帯で、本役は近習であり、公用方役人のなかでは、明らかに低位の位置づけの掛りであった。老中就任から二か月後の天保一二年八月、四名の手留方は、人手不足で職務に支障が出ていること、藩内では近習としての認識のみで、老中補佐としての働きが評価されず、褒美も得られないことを訴え、兼務解消と人員増を求めた。現場ではすでに不満が渦巻いていたのである。

しかし改善は進まず、翌天保一三年三月にも同様の申立が出される。四名のうち一名が看病で帰郷し、業務はさらに滞った。老中日記の作成は遅れ、不慣れから作り直しが多発し、他家の日記の書写も進まない。翌四月の申立では、真田家は藩主に幕職経験がないため、手留方も殿中の格式に不慣れで日記の執筆作業が困難であること、慣れるまで一～二か月を要すること、帰宅も二～三日に一度という過酷な勤務状況が訴えられた。

藩は問題の本質を理解するのが遅れ、曖昧な対応が続いた。兼務体制は解消されず、わずかな増員があったのみで根本的改革には至らなかった。他家も同様の体制であったため、真田家だけの変更は難しかったこともあろう。幕職経験不足の真田家において、老中職の矛盾がより鮮明に表れたといえる。

幸貫は天保一五年（弘化元）五月に老中を退いた。手留方が作成した真田幸貫の老中日記は藩留守居役のもとに置かれ、後任老中からの閲覧に備えた。他藩でも同様の方式が採られていた可能性が高い。日記は老中執務の基本情報としてアーカイブ化され、貸出対象として整備され、記事検索のためのツールも多く作られた。これも手留方の功績といえる。

手留方の史料は、人手不足、組織内の無理解、兼務による過重労働など、現代にも通じる問題を生々しく伝える。組織の機能を支える人間の状態に目を向けることの大切さを教えてくれる史料であり、「働いて、働いて……」という風潮に流されず、勤務状況や褒賞への適切な配慮が求められることを教えてくれる。

本小稿は、新刊『幕藩アーカイブズの資源化研究』で扱った史料の一部を紹介した。役職と家の関係を文書管理の視点からまとめた研究であり、手に取っていただければ幸いである。

（国文学研究資料館名誉教授）

二〇年越しの回答

三宅秀和（みやけ ひでかず）

一六世紀から一七世紀にかけての桃山時代に、狩野光信（一五六一／六五～一六〇八）という絵師がいる。「檜図屏風」や「唐獅子図屏風」を描いた狩野永徳の長男だといえば、そうかと思っていただけるかもしれない。慶長五年（一六〇〇）に再建された滋賀県大津市の園城寺勧学院客殿のうち、再建時に遡るとみられる「一の間」と「二の間」の二室の障壁画がこの人の作になる。私は勧学院障壁画の存在を知った学部二年生の二〇歳の頃から、この光信について考えてきた。

卒業論文の対象にもしたが、四年時の五月の連休明けの中間発表会で、副査の先生に「勧学院画が光信筆という根拠は何ですか」と訊かれた。「勧学院客殿の修理銘です」と答えたが、修理銘の年紀は寛政一一年（一七九九）であり、その先生が言わんとしていることは制作から二〇〇年後の史料が根拠になるのかということであった。先行研究では勧学院画は狩野光信の基準的作例となっており、これを基に様式が通ずる他の作品が光信の手になると位置づけられているから、根本的なところで疑問を突きつけられたのである。

史学科の書庫に通って（私は哲学科であった）、当該時期の諸史料を繰ってみはしたが、刊本に出てくるものなら誰か研究者が既に紹介しているはずで、光信が勧学院障壁画に関わったことを示す史料がその程度で見つかるわけもなかった。結局卒論では、二〇〇年後の史料ではあるけれども概ね信用できると検証してきた先行研究をできるだけ丁寧に引くことで、勧学院画を光信筆として論じた。先の質問は、絵師の特定作業と様式以外にも目を向けさせようとする意図があったと今にして思われるが、それに反して私は、その後も狩野光信という絵師とその様式について考えることにこだわり続け現在に至っている。

その後、画家伝の評価や『土佐家文書』の「土佐光吉宛狩野山楽書状」などから窺える光信の立場や、光信の様式による源氏絵の作例など、光信についてぽつぽつ論文を出していったが、勧学院画を光信筆とする根拠については進展がなかった。進展らしきものがあったのは、「国立国会図書館デジタルコレクション」で、国会図書館所蔵の作品画像が見られるようになってからである。

そこで同館所蔵の巻子装の「賦何船連歌」料紙下絵を知ったが、

これは慶長六年（一六〇一）八月一三日に照高院道澄を主賓に迎えて山中長俊が亭主として催した連歌の懐紙である。「光信」の朱文円郭壺印が巻末と裏面に捺され、下絵を狩野光信が施したことが奥書きおよび箱書きに記されているものである。国会図書館のサイトから画像をダウンロードし、書きつけられた連歌の文字で見えにくい下絵を画像編集ソフトを用いて調整しながら見ていったところ、雲や樹木・岩の描写、画面構成が、勧学院客殿の一の間の障壁画とよく似通うことがわかった。捺されている「光信」印は、従来知られていた「豊臣秀吉像」と栃木県立博物館の「達磨図」にあるものとは異なる印で、他に捺されている作例がないため、下絵そのものを見て評価しなければならないものであった。

国会図書館のサイトでは裏面の印は一顆しか画像がなかったが、後日、国会図書館に拝見しにいったところ、「光信」印は下絵表面の巻末に一顆、裏面には三ヵ所、全部で四ヵ所に捺されていることが確認できた。二つ折りの懐紙四枚を折り目で切断したものを横に貼り次いで巻子装にしたもので、四枚の懐紙それぞれに印が捺されていたのであった。下絵のモチーフは、その部分に書かれる句の内容と関係しており、例えば第二紙は向かって右半に薄の群がりと、左端に植わる桜樹とその花びらを右方に散り敷いた情景とが描かれるが、前者は「みたれあひたるすゝきいくむら」、後者は「あらしおちくる袖のかたしき」を受けた「ちりぬともかへりはせしの花のもと」に由来している。つまりこの下絵は、連歌の内容を絵師に伝えて関連するように描かせた注文制作品であり、下絵の制作者を示すものとして、一枚ごとに印を捺したと判断されるのである。

制作当時に「光信」印が捺されたと考えられるこの下絵は光信筆と考えられることになるが、モチーフの描写が勧学院障壁画と通じ合うことは、勧学院画もこの下絵同様に狩野光信が手がけたことを示すことになるだろう。この印章の使用例が他にないのが弱点ではあるけれども、少なくとも制作時期がだいたい一年違いの連歌懐紙下絵と勧学院画が相互に支え合うものであるとはいえるだろう。勧学院画が光信の手になることを裏付けたいと思ってきたが、思いがけないやり方で修理銘を支持することになった。十分なものではないが、およそ二〇年前の質問にようやく答えを用意できた思いがしている。

ところで、美術史の研究者の中には憑依系というべきタイプの方々がおり、絵を見てその絵を描いた絵師の気持ちや考え、人間関係とそれへの対応までわかってしまうようなのだが、私はタイプが異なり、絵を見てもその絵師の人間性は全く立ち上がってこない。ただ、「賦何船連歌」下絵と勧学院画を比較していて、前者の樹木の方が弓なりやくねりが大きかったりして、料紙下絵のような小画面に描くのと襖のような大画面に大きく描くのとでは異なり、形をそのまま拡大・縮小しているわけではないことに気がついた。とても小さなことではあるが、慶長五、六年頃の狩野光信の画面の大小による描き分けということから、光信という人の考え、意識に、少し触れることができたような気持ちになった。

（群馬県立女子大学准教授）

大唐異韻

中田美絵（なかたみえ）

拙著の校正が終わった開放感から、久しぶりに映画館に足を運んだ。お目当ては「長安のライチ」（監督：大鵬〈董成鵬〉／原作：馬伯庸『長安的荔枝』）である。「長安のライチ」は、唐・天宝年間の政治・社会的空気を描き出した作品になっており、しばらく自分自身が執筆で向き合ってきた時代感を、視覚的に楽しむことができた。

主人公は地位こそ高くないが善良な役人で、皇帝の勅命を受け、楊貴妃の誕生日に間に合わせるべく、生のライチを嶺南から長安へと運ぶ「ライチ使」として奔走する。ときは盛唐、玄宗皇帝の治世である。「開元の治」で知られる玄宗だが、天宝期も後半に入ってくると政治は弛緩し、宮廷では権力闘争が繰り広げられる。そうした渦中に巻き込まれていく主人公をはじめ、さまざまな階層の人々が懸命に生きる姿が描かれており、市井にも目を向けた興味深い内容であった。

ところで、このライチ輸送のミッションはたびたび介入を受ける。その役を担うのが魚朝恩である。魚朝恩は正史に立伝される有名な宦官だが、どちらかといえば安史の乱以降に活躍するため、本作での登場は史実よりもやや早い。それはさておき、彼は、「宦官」＝「政治を乱す」という典型的な役回りを担わされている。本作では宰相もまた政治を乱す存在として描かれており、単純な宦官悪玉論に回収されない。とはいえ、私利私欲で動く存在として描かれていることに変わりはない。

宦官は、皇帝のプライベート空間である「内廷」で活動するため、皇帝に取って代わることはないにせよ、その傍らにいることで権力を掌握しやすいとされる。女性や宦官が仕えるのが内廷であるなら、皇帝を頂点に政務を担う官僚が仕える場が「外廷」である。唐代は宦官が政治に深く関わったとされ、とりわけ安史の乱以降にその傾向が顕著になる。軍事力を握り政治に干渉するようになった宦官の「専横」が強まるというのが通説である。「長安のライチ」にみられる宦官（内廷）と宰相（外廷）のライチ輸送をめぐるさまざまな策謀は、こうした安史の乱以降の実態を反映させているのかもしれない。

では、宦官に対する負のイメージはなぜこれほど強いのか。宦官の姿を記録してきた多くの史料は、正史や『資治通鑑』など、王

朝の正統的立場から書かれたものである。つまり、私たちが学ぶ中国史には、こうした史書の価値観が色濃く反映されている。また、儒教社会において重視される「孝」の観点からすれば、身体を損ない子孫を残せない宦官は「孝」の道にもとる存在とみなされ、彼らが大きな影響力を持つことは正統的価値観では忌避された。

一方、仏教僧侶らが書き残した資料に基づいて復元される宦官像は、やや異なる。唐代の仏教に関する同時代史料を見ると、宦官が僧侶や寺院のスポンサーとしてしばしば登場する。彼らは仏典の翻訳事業を支え、政治の舞台における自らの存在を正当化し、さらに唐国内の混乱を鎮めるべく積極的に仏教儀礼に関与したり、唐を仏教的世界観の中心として位置づけようとした。また、たとえ社会的地位を得て儒教的価値観に沿おうとしても、宦官は外廷からの差別的視線から逃れられなかった。そうした彼らに対し、仏教は修道を通じて身体回復の可能性を与えるなど、救済の道を開いていたことがうかがえる。

「長安のライチ」には、広州を拠点に活躍するペルシア商人・蘇諒（そりょう）が登場する。時期はこれよりも後の九世紀になるが、実在した同名のペルシア人をモデルにしているのだろうか。

そういえば、史実のほうの蘇諒は、中央禁軍の神策軍の散兵馬使の称号を持っていた。実は、この神策軍の長官である護軍中尉は、宦官のポストであった。さらに護軍中尉は仏教界を統轄する功徳使を兼ねた。こうして宦官のもとには軍人や仏教僧侶が集まり、そのなかには外来系の人々も含まれていた。いわば儒教秩序の外側に置かれた人々が、宦官を中心に緩やかに結びついていたのである。

この構造は、「長安のライチ」の舞台となる玄宗期以前、女性が活躍した時代にも見られた。則天武后（武則天）や太平公主といった后妃・公主たちは、仏教寺院や僧侶、さらには「胡」と呼ばれた外来人と結びつき、内廷を基盤とした独自の政治的ネットワークを形成していた。玄宗はこの体制からの転換を図り、これが後に「開元の治」と呼ばれる政治秩序の確立につながった。本作の舞台である天宝期は、その玄宗の統治が終焉を迎える時期にあたる。このあと、安史の乱を経て軍事と仏教を掌握した宦官が台頭する新たな時代が到来する。いわば「女性から宦官へ」と権力の担い手が移り変わる過渡期である。

しかし、女性の時代から宦官の時代へと担い手が変わっても、内廷を軸に「周縁」の人々――すなわちここでは、儒教秩序の外側に置かれた女性・宦官、仏教僧侶や外来人――が仏教を介して結びつくという構造そのものは、唐代を通じて持続していた。仏教側の視点から唐代を覗き見ると、儒教的価値観とは異なる、もうひとつの唐朝の姿が立ち現れてくるのである。

「仏国の風範、亦復た是くの如し」（『性霊集』巻四「奉為国家請修法表一首」）。九世紀初め、唐に渡った空海は、長安でさまざまな仏教法会を目にし、こう評した。この理想的な仏教国としての唐の姿は、まさに「周縁」の人々によって形づくられたものだったのである。

（京都産業大学准教授）

漫画家清水崑の「詩的なあたたかさ」のある政治漫画

入江清佳（いりえ さやか）

十数年前、長崎市の学芸員として採用が決まり、入庁前に長崎市内のミュージアムを訪れた。その内の一館が「長崎市清水崑展示館」だったのだが、この時は同館を担当するとは思わなかった。あの日に出会った清水崑（しみずこん）の漫画は、私が見知ったストーリーマンガとは異なる作風で「これが漫画なのか」と心に引っかかった。偶然にも入庁二年目は生誕百年の年にあたり、記念事業のための調査やご遺族に話を聞く機会を得たことで、より関心を持つようになった。今思い返すと、運命的な出会いだったと感じる。

清水崑（一九一二～七四）は、所謂大人漫画（主に一コマで表現される風刺画などの大人向けの漫画だが、様々な様式や作風が見られる）の団体である新漫画派集団（戦後「漫画集団」に改称）に所属し、かっぱ漫画、挿絵、ルポルタージュなど戦前から戦後にかけて、多彩な活躍をした漫画家である。特にかっぱ漫画は、一九五三年から『週刊朝日』で連載された「かっぱ天国」が人気を博し、清水の代名詞といえるキャラクターとなった。京都伏見の酒造会社黄桜のＣＭで清水のかっぱを記憶する人もいるだろう。一方、戦後復興期に『朝日新聞』に掲載された政治漫画で名をあげたことは、現在忘れられつつある。同紙には、政治漫画のほか似顔絵や挿絵、ルポルタージュ、題字など一九四七～七四年までの二八年間に、管見の限り五七七六点の作品が掲載された。この中で政治漫画は、嘱託漫画家となってすぐの一九四八～五五年までの期間に多くが制作され、この時期の清水の中心的な仕事となっている。政治漫画家は、国会の傍聴や政治家への取材などを行い、その時の政治状況を漫画に描く。また、選挙前後には政治家へのインタビューを行い、絵とともに文章を執筆するなど取材能力や文章の巧みさも求められた。一九五一年には、サンフランシスコ講和会議へ朝日新聞社から派遣されており、絵と文章で講和会議とアメリカ国内の様子を伝える大役も担った。

清水が政治漫画を本格的に描きだしたのは、戦後のまもない頃に文士たちが発刊した『新夕刊』という新聞に、文芸評論家の小林秀雄が政治漫画を描くよう、勧誘したことがきっかけだった。この時、清水は政治漫画に苦手意識があったが、小林に説得され描き始めるとこれが好評となる。その後、朝日新聞社に引き抜かれるのだが、清水はこれを小説家の大佛次郎（おさらぎ）の推薦だと推測し、日

記に記している。真偽は定かではないが、大佛は同紙にたびたび小説を連載するなど朝日新聞社と関係が深く、さらに清水に親身に絵などの助言をしていたことから、このように考えたようだ。

清水は、入社当初の一九四七年三月三日の日記に、政治漫画に対する作風の模索として、「「詩的なあたたかさ」なら出せさうだ、そういう雰囲気の政治漫画を確立したい」と書いている。彼の政治漫画を見ると、政治家が等身低く親しみのある顔にデフォルメされ、コミカルな動きが太めの柔らかな線で描かれている。また、政治事件を芝居や相撲に見立てることも多く、鋭い風刺で政治への危機感を伝えるというよりは、庶民にも親しみやすい内容が多い。さらに、彼の言説を追うと、政治漫画に東洋の美術性を取り入れる意識もあったようだ。このようにして描き出された清水の政治漫画を、文芸評論家の尾崎秀樹（ほつき）は「風刺性に欠け、あたたかいユーモアに特色があった。（中略）彼の政治漫画がひろくアピールしたのは、風刺の刃ではなく、庶民的な肌合いによるもので」あったと評価する。

清水崑の描いた政治漫画の原画
（部分、長崎市清水崑展示館蔵）

一方で、政治的な事象について風刺性をもって描くという政治漫画の中核的要素と、清水のいう「詩的なあたたかさ」は、水と油の関係にある。このため、清水の作風は風刺性が低いと批判を受けた。現実の政治は、政権をめぐる戦いや駆け引きなどシビアなもので、清水の漫画は政治の本質を描いていないという指摘である。このこともあり、清水は、自身が政治漫画に向いていない趣旨の発言をたびたび行っている。また、多くの漫画に描かれた政治家の吉田茂は、清水の漫画を気に入っていたといわれ、そうしたエピソードからも、為政者の脅威となるものではなかったことが窺える。

一九五五年以降、清水の政治漫画の執筆量は減少していく。これは、戦後派の漫画家横山泰三が同じ『朝日新聞』で「社会戯評」の連載を始めたことや、かっぱ漫画の大ヒットなど様々な要因が考えられるが、自身が打ち出した「詩的なあたたかさ」のある政治漫画が批判的に批評されたことも一因と考えてよいだろう。

今回は政治漫画を取り上げたが、冒頭で述べたように清水は多彩な漫画制作を行った。また、新聞、雑誌の他にテレビや舞台、映画など様々なメディアで仕事をしており、切り口の多様さも、研究対象としての清水の魅力である。一方で、清水とあわせて他の大人漫画家たちの作家研究が進み、これを比較検討することができれば、漫画家たちの共通性と独自性、時代から受けた影響、彼らが社会に与えた影響など大人漫画の全体像が浮き上がってくるのではないかと考えている。近年、マンガ研究、メディア研究が深化するなかで、大人漫画家の研究の余地は多分に残されている。

（長崎市文化観光部 長崎学研究所学芸員）

史料探訪 82

光明本尊

高口柚（こうぐち ゆう）
（福井県立歴史博物館学芸員）

福井県立歴史博物館は、昭和五九年（一九八四）に福井県立博物館として開館以来、福井の歴史に関する資料の収集や調査研究を続けてきた。平成一五年（二〇〇三）に福井県立歴史博物館として常設展示をリニューアルし、現在は年二～三回の自主企画による展覧会を行っている。

当館では今春、企画展「阿弥陀さまのすがた―福井 仏教美術の名品から―」（三月一二日～五月六日）を開催中である。本展は敦賀市・西福寺蔵の観経変相曼荼羅図（展示期間：三月一二日～四月七日）をはじめとする名品に加え、寺外初公開となる福井市・西光寺蔵の刺繍種子阿弥陀三尊図など、阿弥陀信仰が生み出した福井ゆかりの約二〇点を展示する。ここでは展示資料より、平成三〇年（二〇一八）に当館が購入した光明本尊一幅（以下本図）について紹介したい。

光明本尊とは、阿弥陀の名号を中心に阿弥陀・釈迦の二仏を配して、天竺（インド）・震旦（中国）・和朝（日本）の浄土教祖師の系図を描いた浄土真宗の本尊画である。親鸞の在世中に元となる図案が構想され、一四世紀に当初の三幅から一幅となって誕生した。

本図は縦一四三・六センチメートル、横九七・六センチメートルの画面からなる絹本著色の作であり、その制作時期は室町時代（一五世紀）とみられる。通規の通り、中央に「南无不可思議光如来」（九字名号）と三六条の光明をあらわし、右に「帰命尽十方无碍光如来」（十字名号）、左に「南無阿弥陀仏」（六字名号）を、その間の右に釈迦如来立像、左に阿弥陀如来立像を、左上に天竺・震旦、右上に和朝の浄土教祖師を配す。天の讃銘帯は下端を残して大部分を失っており、地には『無量寿経』に説く阿弥陀の四八願の抜書を墨書する。

本図のなかで注目すべきは、画面右上の和朝部である。早速、和朝部を詳しくみていくと、まず下から順番に、両手で柄香炉を執る垂髪童形太子が妹子・馬子らの六随臣を従え、次に源信を挟んで法然と親鸞が対坐する。ここには通例の光明本尊と違って、聖覚、信空の二名をあらわさないという特徴がある。これについて

は後に詳しく述べることにして、次に描かれる僧に目を向けると、通例通りに真仏、源海、了海、誓海、明光が並んでいる。

そして最も見逃すことができないのが、明光より後に続く僧である。本図の明光より後には、明覚、（了）尊、円鸞、円海、明尊、明正をはじめとする僧十名が並ぶ。さらに明正より後の僧名を記す短冊札には「釈性尊」「釈□□」「釈明□」「釈性永」「釈払源」とある。なお短冊札は、当初と後世のものが混在しており、明正以下に一名分多くみられる。また敬称は、（了）尊までを「聖人」とし、円鸞以下を「釈」とする。

光明本尊では通例、明光の後に佛光寺第七世で中興の祖である了源、そして了明と佛光寺派の歴代僧が連なる。そのため本図は、了源や了明の名を含まず、明光からの別の門流を示す例として注目されるのである。

光明本尊　福井県立歴史博物館蔵

この明覚系統の門流をあらわす光明本尊は、三重・上宮寺本、同・正泉寺本（以上、室町前期）など本図を含めて六点がある。またこの門流をあらわすのは光明本尊だけではない。岐阜・信浄寺本（応永二二年（一四一五））など和朝太子先徳連坐像という光明本尊の元となる三幅の左幅（和朝幅）から独立して単独幅となったもの五点および茨城・西念寺旧蔵の絵系図一点がある。これらを含めると計一二点であり、本図は館蔵品となる前より、そのうちの一点として知られていた。

それでは、この門流をあらわす他の遺品と比較しながら、本図の和朝部の特徴を改めてみていこう。まずは先に言及した通り、通例の光明本尊が源信、

法然、親鸞の三名に聖覚と信空を加えて五名をあらわすのに対して、本図には二名が描かれない点に注目する。光明本尊でこの二名を欠くものはこの門流に関わらず圧倒的に少なく、この門流をあらわす光明本尊の遺品六点に限ると本図一点のみである。一方でこの門流をあらわす和朝高僧連坐像の遺品をみると、五点すべてに二名を描いておらず、本図と通じる。これより本図にはこの門流の他の光明本尊の遺品五点とは何らか異なる制作事情があったのではないかと想像される。

この制作事情に関連して言及しておきたいのは、本図がこの門流をあらわす遺品の中で唯一越前に伝わったことである。この門流は、京都に進出した佛光寺派とは違い、摂津国の佛照寺を拠点に、近江国の興照（正）寺が与力寺院となることで、近江・伊勢・河内・摂津といった畿内近国へと教線を拡大させていた。本図を除くこの門流の光明本尊の遺品は、三重、滋賀（一つは河内伝来）県下に所在する。一方で本図が元々所在していた越前町（旧朝日町）の千秋家は、寛政四年（一七九二）から明治維新まで鯖江藩六か組の一つである乙坂組を支配する大庄屋を勤めた家であり、室町時代に遡る本図が千秋家に伝わった経緯は不明である。本図の伝来は、先に挙げた他の光明本尊との違いに関わる重要な点であり、改めて追究する必要がある。このことは本図の制作事情だけでなく、この門流の教線範囲を知るうえでも重要となってくるだろう。

ここで本図の和朝部には、明正の後につづく僧として性尊、性永という名がみえることに注目したい。まず性尊、性永のうち性尊の短冊札は当初のものである。またこの門流をあらわす他の遺品に「性」の字から始まる僧の名はみられない。そのため、本図の特徴として「性」の字から始まる僧に伝わった点を指摘できる。この特徴は本図の制作事情の解明に手がかりを与えてくれるかもしれない。

このように本図は、明覚系統をあらわす光明本尊の貴重な一点であった。またこれからの研究の進展が期待されるものでもある。当館では本展に向けて本図の赤外線撮影を行った。会場では撮影した写真の一部をパネルで紹介している。当館にお立ち寄りいただき、ぜひパネルとともに本図をじっくりとご覧いただきたい。

福井県立歴史博物館

【所在地】

〒910-0016 福井市大宮2-19-15
TEL：0776-22-4675
FAX：0776-22-4694
ホームページ:https://www.pref.fukui.lg.jp/muse/Cul-Hist/
X（旧Twitter）@Fukui_rekihaku
Instagram　@Fukui_rekihaku

【交通アクセス】

JR・ハピラインふくい 福井駅より
◎タクシー 約10分
◎京福バス:「大和田大学病院線」県立歴史博物館前下車
◎コミュニティバスすまいる:「田原・文京方面」宮前町下車
◎えちぜん鉄道:「三国芦原線」西別院駅下車
◎福井鉄道:田原町駅下車
車:北陸自動車道 福井北インターから西へ約15分（駐車場あり）

【特別展】

2026年3月12日（木）～5月6日（水・振替休日）
企画展「阿弥陀さまのすがた～福井 仏教美術の名品から～」

【開館時間】

9時～17時（入館は16時30分まで）
【休館日】水曜日（祝日は開館）

【入館料】

一般100円（20名以上の団体は2割引）、高校生以下・70歳以上の方無料

編集長より

▼ネット書店では「在庫なし」と表示されていても、出版社にはまだ在庫が残っている場合があります。ネット上の表記はあくまでその店舗の在庫状況ですが、ふだんネット書店をご利用の読者にとっては、そこで見つからなければ品切れだと思われるのも無理のないことだと思います。弊社としても、できるだけネット書店の在庫を切らさないよう注意はしておりますが、行き届かずご不便をおかけすることもございます。お目当ての書籍が入手しづらい場合には、お近くの書店、または弊社まで、お問い合わせいただければ幸いです。

▼丸善 京都本店様で出版記念イベントを行います。また、由学館賞を受賞された海原亮先生の受賞記念講演会が、大分県竹田市で開催されます。お近くの方はぜひお申し込みください。

【書店イベント・講演会】

4月25日（土）『オスマン帝国と日本趣味／ジャポニスム』出版記念講演会（ジラルデッリ青木美由紀先生×松原史先生）於・丸善 京都本店（詳細は丸善 京都本店HP）

5月16日（土） 第2回中川久定記念基金・記念講演会（海原亮先生）於・竹田城下町交流プラザ 多目的ホール（詳細は中川久定記念基金事務局）

編集後記

▼日本の城を離れた杉戸たち。失われた徳川の世の記憶に海の向こうから光が当たる構図は前前号の「幻の源氏物語絵巻」と同じ。自分に輪郭線を引いてくれるのはいつだって他者なのかもしれません。（R）

▼お風呂で本を読みたい、でも紙は濡らしたくない。数年来の悩みが、オーディオブックと防水スピーカーの導入であっさり解決しました。しかもサブスクで聞き放題。ただ残念ながら弊社の本は非対応です。（n）

▼にわかに腰痛を感じはじめ、深刻な運動不足を自覚しています。春らしいお天気なのだからせめて歩こう、と意気込んで散歩に出かけるも、途中で雨に降られることがしばしば。雨女の自覚もあります。（e）

▼表紙図版：紅葉に鹿図杉戸（フィラデルフィア美術館蔵）

Deer and Maple Leaves, Philadelphia Museum of Art
Purchased with the Fiske Kimball Fund and the Marie Kimball Fund, 1966
Acc#:1966-211-7a,b; 8a,b

■定期購読のご案内

『鴨東通信』は年2回（春・秋）刊行しております。代金・送料無料で刊行のつどお送りいたしますので、小社宛にお申し込みください。バックナンバーも在庫のあるものについては、お送りいたします。詳細はホームページをご覧ください。

鴨東通信（おうとうつうしん） No.122
2026（令和8）年4月20日発行
発行　株式会社 **思文閣出版**
〒605-0089
京都市東山区元町355
tel 075-533-6860
fax 075-531-0009
e-mail pub@shibunkaku.co.jp
https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/
表紙デザイン　HON DESIGN

飯沼賢司著

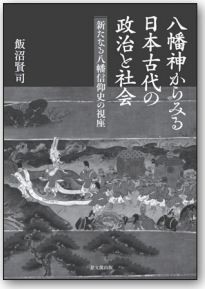
八幡神からみる日本古代の政治と社会

―新たなる八幡信仰史の視座

3月刊行

A5判上製・五六八頁／定価 一三、二〇〇円

現代においては全国に四万社以上あるといわれる八幡宮。その祭神である八幡神は、八世紀初め、日本の神祇体系に属さない神として古代律令国家の西の周縁部「宇佐」に忽然と出現し、数十年の間に仏教守護神として国家神に躍り出る。本書は、文献史料に加えて八幡宮の祭礼や伝承から当時の政治や社会状況を読み解くなかで、この謎を紐解く。八幡神はその後も時の政治状況と密接に関係し、神の姿を変身させる、時代を写す鏡のような存在であった。その政治性こそが八幡神の本質であると論じる本書は、既存の八幡神研究とは異色のものである。



【目次】

序章
第Ⅰ部　八幡信仰の成立と展開
第1章　奈良時代の政治と八幡神
第2章　僧法運からみた八幡神論―法運と八幡神の出会いから
国家神への道を読み解く
第3章　八幡大菩薩成立の歴史的背景―聖武天皇の国家構想と関連して
第4章　女性史からみた道鏡事件―宇佐宮における女祢宜託宣と亀卜の対決
宇佐宮女祢宜概史
補論　八幡宮における二つの「比売神」成立の意義
第5章　「八幡神」からみた「民族」「国家」の問題について
付論　御霊信仰のはじまりと八幡信仰の新展開
第6章　権門としての八幡宮寺の成立
第7章　古代における八幡神と信仰のひろがり
第8章
第Ⅱ部　八幡宮の祭礼と伝説の世界を読む
第9章　宇佐宮放生会を読む
第10章　宇佐宮行幸会を読む
第11章　「鍛冶の翁」と「炭焼小五郎」伝説の実像
第12章　八幡神と神輿の成立
第13章　宇佐宮の遷宮の世界を読む―杣始の神事と杣山
終章

金玄耿著

中世的身分秩序と家格の形成【30s】

多様な史料を活用し、それらに表れた貴族の出自や身分に関わる言葉を辿っていく。

定価 九、三五〇円

飯沼賢司編

阿蘇下野狩史料集

「下野狩（しものかり）神事」の史料である、永青文庫所蔵『下野狩日記』『下野狩旧記抜書』とその関連文書、阿蘇家所蔵下野狩関連史料を翻刻。

定価 八、二五〇円

倉本一宏著

摂関期古記録の研究

日記とは何か、古記録とは何か？　古記録研究の到達点を示し、未来への礎となる一書。

定価 八、八〇〇円

荒木浩編

〈無常〉の変相と未来観

―その視界と国際比較

「無常」概念にとどまらず、〈グローバル〉な〈アジア〉の中での日本古典文化の解明を目指す。

定価 一六、五〇〇円

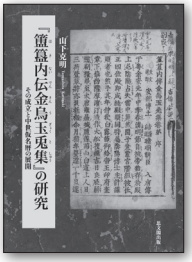
表示価格は税込

山下克明著

『簠簋内伝金烏玉兎集』の研究

―その成立と中世仮名暦の展開

1月刊行　A5判上製・三八八頁／定価 九、九〇〇円



『簠簋内伝金烏玉兎集』は安倍晴明撰に仮託され、中世から近世にかけて広く流通した暦書であるが、従来その成立背景は不明のままであった。本書は多彩な史料と詳細なテキスト分析をもとに、天台顕密仏教圏で仏教・牛頭天王信仰と暦が結びつき、『簠簋』が成立したこと、それと共に、その狙いが各地で普及し始めた中世仮名暦を通した、仏教教化の拡大にあったことを指摘。また、これに対抗して「摺暦座」を立ち上げ、京暦（のちの大経師暦）を発行した暦道賀茂氏の動向も詳論して、中世における暦をめぐる動態を明らかにした。さらに古態本の翻刻・書き下し文、古活字版の影印も収録。『簠簋』研究の基本図書にして、決定版である。

芳澤勝弘著

一休、胡乱を生きる

―『一休和尚年譜』を読む

10月刊行　A5判上製・四二〇頁／定価 一一、〇〇〇円

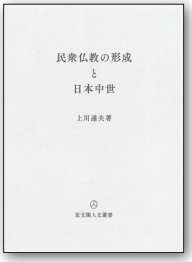
十五世紀、一休宗純が生きた時代は、足利義満の治世に始まり、嘉吉の乱、応仁・文明の乱へと続く激動期にあたる。本書は、一休研究の基礎史料である『一休和尚年譜』の詳細な訳注に加え、『狂雲集』『自戒集』、墨跡や同時代の古記録を駆使し、一休の生涯を時代の中に位置づける。京の都で万単位の僧侶が武装して主張を展開し、放火や殺人が横行する異常な社会の中に置くと、一休の破戒と風狂は新たな意味を持つ。禅宗研究のみならず、室町時代史としても意義深い一冊。

上川通夫著

民衆仏教の形成と日本中世

【思文閣人文叢書】

A5判上製・五〇四頁／定価 一一、〇〇〇円



国家宗教として日本に導入された仏教は、中世にいたって広く社会に定着したとされる。ただし中世仏教は、権門体制論や顕密体制論において、権力側が民衆を編成し、抑圧する装置としての側面が強調されている。はたして中世の民衆は仏教を押し付けられただけの存在なのか？

本書は、民衆自身の生存と権力支配への抵抗を求める普遍的な思想が、仏教の用語や思想（慈悲、不殺生、和合など）と接することで表現された可能性を追求する。断片的ながら願文、起請文、村の禁制、地域の小規模寺院の存在などに史料的痕跡を見出し、民衆思想として萌芽した状況を浮かび上がらせる。

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

桃崎有一郎（武蔵大学教授）著

流鏑馬の研究
―騎射の礼制史

3月刊行　A5判上製・六七二頁／**定価　一〇、四五〇円**

流鏑馬――疾走する馬上から矢を放つこの技芸は、武芸であり、同時に神事でもあり、日本史において特異な位置を占めてきた。本書は、その源流たる古代の「薬猟」前史から、鎌倉幕府の最重要儀礼へと至る過程を、史料に基づいて精緻に解き明かす。中世に数多く存在した儀礼のなかで、なぜ流鏑馬こそが武家文化を象徴する儀礼へと昇りつめ、そして急速に姿を消したのか。その背景を探ることで、中世武家政権のアイデンティティと世界観が鮮やかに浮かび上がる。流鏑馬史上初の総合的考察によって、中世儀礼研究に新機軸を打ち立てる。

【目次】

緒言
第一章　執筆意図と問題設定
第二章　古代日本の端午節騎射の成立と薬猟―五月五日に騎射する意義の東アジア的源流
第三章　古代国家における端午節（五月五日節）騎射・貢馬行事の確立
第四章　五月節（端午節）騎射の廃絶と小五月の成立・変容・廃絶
第五章　京都における流鏑馬行事の成立とその要因―摂関家騎射・競馬と永長の大田楽
第六章　「ヤブサメ」「流鏑馬」の語源と考案者―東国方言と紀伝儒
第七章　流鏑馬の恒例神事化と治天の祭礼―京郊・諸国諸社への伝播経路
第八章　鎌倉幕府流鏑馬研究の論点整理―〝現代版中華思想〟の克服
第九章　鎌倉幕府の基礎アイデンティティ―終わりなき戦時を生きる勇士の軍営
第十章　鎌倉幕府の対外アイデンティティ―唯一の国土警衛機関
第十一章　源頼朝の弓馬故実整備と鎌倉幕府の流鏑馬―建久五年検討会の再検討
第十二章　軍神接待としての流鏑馬―勇士たる基礎アイデンティティの維持行為
第十三章　鎌倉幕府における流鏑馬役の諸相と流鏑馬の衰退
第十四章　執権北条時頼による鎌倉幕府アイデンティティ再構築
第十五章　―流鏑馬・武芸奨励と《礼》
第十六章　南北朝・室町期の流鏑馬役と諸国諸社―守護所が賦課する公方役
附録　幕府流鏑馬行事の廃絶―守護神転換・秘事口伝化・戦国
結論と展望　江戸幕府における流鏑馬の〝復元〟と〝伝統〟の創作
―小笠原家・赤沢家の系譜事蹟の虚実
京都小笠原家後裔熊本藩士小笠原家系図

桃崎有一郎著

鎌倉幕府礼制史
―儀礼論と組織論

A5判上製・六一六頁／**定価　九、三五〇円**

〝大盤振舞〟の語源となった鎌倉幕府の共食儀礼「垸飯（おうばん）」を徹底的に分析し、法を補完する礼の役割を解明しつつ、全く新しい鎌倉幕府像を導き出す。同僚＝傍輩（ほうばい）の結束を根幹とする〝武士の組合〟としての鎌倉幕府、北条氏権力の本質を逸脱した北条泰時の執権政治、御家人を権力と説得で儀礼の場に引きずり出す執権時頼、将軍と得宗が「公」として並び立つ末期幕府、足利尊氏の登場を促した深刻な人材不足――。鎌倉幕府の本質と実態の葛藤を追跡し、室町幕府成立の必然性に説き及びつつ、鎌倉幕府の成立宣言を発見して幕府成立年論争に終止符を打つなど、歴史学的儀礼論を再構築しながら通説を塗り替える鎌倉幕府論。

表示価格は税込

大友一雄（国文学研究資料館名誉教授）著

幕藩アーカイブズの資源化研究

―「家」の文書管理と武家社会

4月刊行

A5判上製・三四〇頁／**定価 九、九〇〇円**

江戸時代、役職に就いた大名・領主たちの執務の多くは、その「家」の家来たちが担っていた。したがって、老中や奉行への就任では、「家」としての知識や技術の獲得が問われ、師範による研修制度が整備された。転封のさいにはスタッフが入れ替わり、情報・記録の引き継ぎが前提となった。また、身分制社会における文書認識は、厳しい文書管理と処罰を現実とした。本書では、大名家の文書群をアーカイブズとして体系的に把握するために、幕藩組織の構造や機能にまで射程を広げて分析。「家」における記録管理や大名家文書の生成・利用を具体的に解明し、アーカイブズ学と歴史学の両面から武家社会の実態に迫る。

【目次】

序　アーカイブズ資源化研究の動向と狙い
第1章　幕府寺社奉行と文書管理
第2章　幕府寺社奉行の記録管理をめぐる動向―法整備との関連に注目して
第3章　近世中期における幕府勤役と師範―新役への知識の継承をめぐって
第4章　幕府奏者番にみる江戸時代の情報管理
第5章　天保期幕府老中職にみる公用方役人について―松代藩真田幸貫を事例に
第6章　天保期における老中職公用方役人と情報管理―老中日記の作成と収集
第7章　幕府老中職文書群に関する基礎的研究―松代藩公用方役人と文書システム
第8章　転封にみる領知支配と記録
第9章　転封にみる領知引渡手続について―三つの郷村高帳に注目して
第10章　近世の文字社会と身分序列―秋田藩を事例に
結語にかえて

国文学研究資料館編

近世大名のアーカイブズ資源研究

―松代藩・真田家をめぐって

真田家のアーカイブズを中心に、記録管理の観点から分析を試みたはじめての実践的な研究成果。

定価 七、七〇〇円

国文学研究資料館編

アーカイブズの構造認識と編成記述

【オンデマンド版】

構造的な理解（構造認識）とその表示（編成記述）について、実践的な議論を展開。

定価 八、八〇〇円

太田由佳訳／松田清注

訓読　豊後国志

好評2刷

古代から近世にいたる豊後の地理・歴史・風俗・産物などを、整然とした構成と簡明な漢文で記載した江戸時代の地誌を読み下す。

定価 七、七〇〇円

末岡照啓著

徳川幕臣団と江戸の金融史―札差・両替商の研究

第23回徳川賞 受賞

徳川幕臣団の家計を支えた江戸の有力商人の経営実態について、幕府の金融政策を通して分析。

定価 八、八〇〇円

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

佐藤賢一・梅田千尋・平岡隆二編

幕府天文方の研究

3月刊行

A5判上製・五一二頁／定価 八、二五〇円

江戸幕府の一部局として誕生した「天文方」は、暦の作成をはじめ西洋天文学の受容や測量、さらには翻訳や外交にまでかかわる多面的な性格をもつ存在だった。本書は、その始まりである貞享改暦から幕府の終焉まで、約180年間にわたる天文方の歩みを、多分野の研究者による最新の知見で描き出す。和算・陰陽道・洋学など多岐に広がる学問領域を横断し、地域・組織・人物のネットワークを精緻にたどることで、これまで断片的にしか語られてこなかった天文方研究の空白を埋め、通史的な輪郭を与える試みである。

【目次】

序　（佐藤賢一）
幕府天文方関連年表・歴代天文方の任期概略図

第Ⅰ部　天文方の成立―貞享の改暦まで

第1章　天文方に至るまで―貞享改暦と天文方の役割　（梅田千尋）
第2章　渋川春海の改暦と神道―保科正之・山崎闇斎との関係　（林淳）
第3章　幕府天文方と和算家のネットワーク―建部賢弘から山路主住まで　（佐藤賢一）

第Ⅱ部　天文方の転機―徳川吉宗と宝暦の改暦

第4章　徳川吉宗の数理科学書収集と長崎聖堂―『暦算全書』初渡来とその背景　（平岡隆二）
第5章　『渋川氏記録』と明和期の天文方―執務形態と養子問題を中心に　（平岡隆二）
［コラム1］　幕府天文方と久留米藩の和算家　（武正泰史）

第Ⅲ部　近世後期の二つの改暦

第6章　寛政の改暦から天保の改暦へ　（嘉数次人）
第7章　寛政改暦以降の頒暦と天文方　（梅田千尋）
［コラム2］　『暦記録』にみる天文方の江戸暦出版への姿勢　（小田島梨乃）

第Ⅳ部　天文方の拡大と終焉

第8章　越中筏井家文書にみる高橋家と和算家との関係　（佐藤賢一）
第9章　阿蘭陀通詞と幕府天文方―馬場佐十郎を中心に　（大島明秀）
第10章　天文方による外交業務の展開―文化・文政期を中心に　（松本英治）
［コラム3］　幕末の彗星観測　（岩橋清美）
第11章　開陽丸引き揚げ文書について―幕府天文方と開陽丸　（佐藤・梅田・平岡）
終　章　幕府天文方の終焉　（佐藤賢一）

松浦清・真貝寿明編

天文文化学序説
―分野横断的にみる歴史と科学

『天文文化学』と命名する文化史・科学史の融合分野の創設を志し、文理にまたがる視点からの論考を掲載する。

定価 一〇、四五〇円

洋学史学会　監修／青木歳幸、海原亮、沓澤宣賢、佐藤賢一、イサベル・田中・ファンダーレン、松方冬子編

洋学史研究事典

グローバルな社会における洋学史研究の成果を盛り込んだ最新の研究事典。

定価 一四、三〇〇円

海原亮著

近世藩医の学問と医療環境

2025年度 中川久定記念由学館賞 受賞

藩医たちに焦点を定め、その身分＝生業の特質、知識や技術の獲得・継承と社会への普及のありようを明らかにする。

定価 七、一五〇円

牧知宏著

近世京都における都市秩序の系譜

近世京都における「惣町」に着目し、京都の都市秩序の系譜を明らかにする。

定価 一〇、四五〇円

表示価格は税込

佐藤一希（名古屋大学准教授）著

近世後期の皇位継承と天皇・女院【30s】

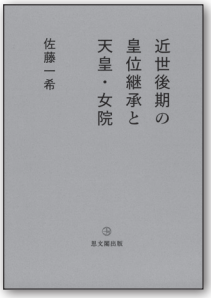
3月刊行

A5判上製・三七〇頁／定価 八、八〇〇円

近世後期の光格天皇の践祚は、近世には唯一といえる大きな血統転換の伴う皇位継承であった。十八世紀中葉から幕末期にかけての皇位継承は、朝廷内のいかなる過程を経て展開し、江戸幕府との関係の中でどのように実現に至ったのか。本書は、光格・仁孝・孝明三代にわたる「閑院宮系」天皇の皇統意識と実際の皇位継承をめぐる動向、さらにはその政治的作用を追究するにあたり、女院や後宮勢力などの天皇家の女性や皇子女・世襲親王家の動向を視野に入れて、近世後期の天皇像を動態的に描き出すものである。

【目次】

序章　近世天皇・朝廷研究の成果と本書の課題
第一章　十八世紀中葉の皇位継承と内親王・親王家
第二章　近世後期における「閑院宮系」天皇の皇統意識と泉涌寺―近世天皇家の葬制の変容をめぐって
第三章　寛政～文化期の皇位継承過程と光格天皇―中宮欣子と皇子をめぐる動向を中心に
第四章　文政～弘化期の皇位継承問題と仁孝天皇・新清和院
第五章　開国前夜～幕末期の朝廷と皇位継承―皇子女・親王家・奥向をめぐる動向を中心に
補論　上御霊神社相殿に祀られた怨霊
終章　近世後期の皇位継承と天皇・女院



篠崎佑太著

近世後期の大名家格と儀礼の政治史【30s】

近世後期から幕末期にかけて、「内憂外患」の政治状況下で幕藩関係はいかなる変容を遂げたのか。

定価 一一、五五〇円

中世日本研究所編

無外如大尼 生涯と伝承―中近世の女性と仏教

第40回女性史青山なを賞 受賞

女性と仏教の関係を考えるうえでもっとも重要な存在である無外如大尼。謎多きその出自や人物像を明らかにする。

定価 四、九五〇円

清水翔太郎著

近世大名家の婚姻と妻妾制【30s】

一七世紀から一九世紀までの史料を元に、大名家における婚姻と家族構成員の実態を明らかにする。

定価 九、九〇〇円

法隆寺編

法隆寺史 上―古代・中世 中―近世

日本最初の世界文化遺産である法隆寺1400年におよぶ歴史を通観する、初の寺史。全3巻。

定価 各七、四八〇円

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内 詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

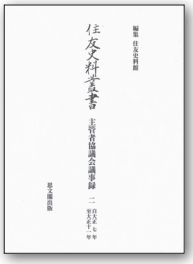
住友史料館編

住友史料叢書 38

―主管者協議会議事録二

1月刊行

A5判上製函入・四三六頁／
定価 一一、〇〇〇円



1620年代から大坂で銅の精錬を業とし、一時世界銅産市場においても重要な位置を占めた住友家は、その後金融・貿易などをも手がけ、近代の財閥につながる豪商の一典型である。その鉱業史料は、質・量ともにわが国屈指の基本史料であり、本叢書は1万数千点にのぼる近世史料のうち、重要で継続する記録類を中心に編纂、第1期～第6期、各期全6冊を刊行してきた。第7期からは、近代財閥として多角的に成長を遂げる、近代史料のなかからも重要な史料を選び、全6冊を刊行する。

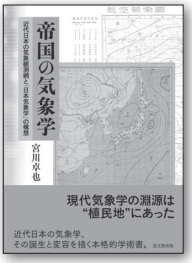
宮川卓也著

帝国の気象学

―近代日本の気象観測網と「日本気象学」の構想

12月刊行

A5判上製・三八四頁／
定価 七、一五〇円



一九世紀半ば、西欧列強が全世界で気象観測を始めた時代。幕末の日本でも緩やかにはじまった近代的な気象観測は、しかし三次の戦争を転機として飛躍的な向上をみせる。天気予報の精度は、観測網の広さと比例する。より精確な理論構築のために観測網の拡張を求める気象学と、戦争遂行と植民地拡大のために正確な気象情報を求める帝国主義は、手を取り合って進んでいった。そして気象学は、ナショナリズムの機運高まる日本で、ある種のガラパゴス的発展を遂げる。当時の気象学者たちが目指した「日本気象学」とはいかなるものだったのか。また、それを支えた植民地での気象観測はどのようにして行われたのか。近代日本気象学の始まりと発展、そして終焉と再出発を体系的に論じる初の学術書。

松田利彦・陳姃湲責任編集

植民地帝国日本とグローバルな知の連環

―日本の朝鮮・台湾・満洲統治と欧米の知

日本本国と植民地台湾・朝鮮、「満洲」で形成された帝国の知は、西欧の知といかなる連環性をもっていたのか。

定価 一五、四〇〇円

鈴木友和著

薄明下の医学教育

【Shibunkaku Works】

4月刊行

旧藩立医育施設関係者の足跡を丹念に追い、近代医学教育がいかにして成立したのかを提示することを試みる。

定価 二、二〇〇円

表示価格は税込

中田美絵（京都産業大学准教授）著

もうひとつの唐朝
―仏教と中心化する「周縁」

3月刊行

A5判上製・五九六頁／
定価 一一、〇〇〇円

近年、唐代史の叙述は、中央ユーラシア史やジェンダーの視点を採り入れ、大きく変わりつつある。しかし政治史においては、皇帝と貴族・儒家官僚ら男性エリートを中心に据えた「正統史観」が依然として強固である。本書は、従来「周縁」に位置づけられてきた女性・宦官・外来人・仏教僧侶を中心に据え、唐代史の枠組みをパラダイム転換する試みである。仏教を媒介として結びついたこの「もうひとつの唐朝」は、禁軍や寺院のような組織を通じ、宗教・軍事・経済面で無視できない勢力を形成した。そして、唐代のじつに三分の一の期間にわたり、独自のやり方で国家を支え、動かしていたのである。

【目次】

序章
第Ⅰ部 「周縁」勢力の台頭とそれに対する反動
第1章 武韋政権における仏典翻訳の政治性
第2章 武韋政権と仏教的世界観の転換―辺土から中心へ
第3章 ソグド人と仏教―唐における「改宗」の諸相
第4章 天竺から来たソグド人―「故金剛智三蔵行記」より
第5章 玄宗開元期の反動―仏教粛正と「胡」への対応
第Ⅱ部 「周縁」勢力の再興とその後
第6章 宦官による政治主導と仏教の役割―『仁王経』翻訳事業の分析より
第7章 不空の長安仏教界における台頭とソグド人
第8章 徳宗期の長安仏教界とユーラシア情勢―『大乗理趣六波羅蜜多経』翻訳事業の分析より
第9章 徳宗期『四十華厳』翻訳にみる仏教的中華
第10章 宦官にとっての仏教―儒教的価値観の超克
第11章 「もうひとつの唐朝」と会昌の廃仏
第12章 「もうひとつの唐朝」の遺産―沙陀の唐中興と五臺山
終章

新見まどか著

唐帝国の滅亡と東部ユーラシア
―藩鎮体制の通史的研究

好評2刷

藩鎮研究に新たな光を当てることで、安史の乱後の唐を支えた藩鎮体制を再評価し、唐帝国滅亡の原因に迫る。

定価 九、三五〇円

木村可奈子著

東アジア多国間関係史の研究
―十六―十八世紀の国際関係

直接的・間接的にかかわり合う各国の史料を駆使して、東アジアの多国間の関係を検証する。

定価 六、六〇〇円

中島楽章著

大航海時代の海域アジアと琉球
―レキオスを求めて

好評3刷

海域アジアの全体状況、ヨーロッパにおける地理認識の変化、古琉球期の琉球王国の活動を多角的に解明。

定価 一〇、四五〇円

小林仁著

中国南北朝隋唐陶俑の研究

実物調査に基づいて、美術史・陶磁史的視点からさまざまな論点を提示し、新たな陶俑研究の確立を目指す。

定価 一四、三〇〇円

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内 詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

ジラルデッリ青木美由紀編著

オスマン帝国と日本趣味／ジャポニスム

11月刊行　A5判上製・三〇〇頁／**定価 七、一五〇円**

フランスを中心にジャポニスムが流行した時代、日本趣味の美術工芸品はアジアとヨーロッパにまたがるオスマン帝国の諸宮殿にももたらされ、宮廷を彩っていた。これらの品々はボスフォラス海峡に臨むイスタンブルの地に、どのような経緯で、いかにもたらされたのか？日本製あるいは外国製による日本趣味の美術工芸品を陶磁器・金工・刺繍・寄木細工等の専門家が現地調査した成果をもとに、草創期の日本・トルコの交流、そしてヨーロッパ周辺に及んだもうひとつのジャポニスムの諸相を明らかにする。

【目次】

刊行に寄せて　（ギョクシェン・ジャンユルマズ）
トルコ国立宮殿局と日本美術工芸品　（ケマル・カフラマン）
総論　オリエントの東―オスマン帝国と日本趣味／ジャポニスム　（ジラルデッリ青木美由紀）
ドルマバフチェ宮殿の「SATSUMA」　（渡辺芳郎）
日本磁器の始まりとトルコの近代宮殿所蔵の有田磁器の特色　（大橋康二）
〔コラム1〕万博を通した日本工芸品の広がり―有田焼の場合　（藤原友子）
〔コラム2〕ドルマバフチェ宮殿が収蔵する寄木のライティング・ビューロー　（金子皓彦）
ドルマバフチェ宮殿の日本製金工品　（清水克朗）
〔コラム3〕トルコのコーヒー文化　（ヤマンラール水野美奈子）
〔コラム4〕イスタンブルのジャポニスムとアール・ヌーヴォ　（ジラルデッリ青木美由紀）
オスマン帝国の宮殿を彩った日本の刺繍　（松原　史）
〔コラム5〕東から西から―イスタンブル来訪貴顕人名録　（ジラルデッリ青木美由紀）
〔コラム6〕山田寅次郎―日本とトルコの友好の礎を築いた男　（谷田有史）
近代オスマン宮廷の美意識と日本　（ジラルデッリ青木美由紀）
あとがき　（ケマル・カフラマン）
付録
主要宮殿施設紹介
トルコ国立宮殿局所蔵美術品掲載写真一覧

万博学研究会編

万博学／Expo-logy

創刊号～第4号

定価 二、二〇〇円（創刊号・第2号）／二、七五〇円（第3号・第4号）

万博研究をリードする万博学研究会による最新の研究成果を毎年発信。

鈴木英明編

移動の文明誌

―「自由」と「不自由」の狭間で

コロナ禍で移動の不自由を経験した世界に問う、移動をめぐる価値観を揺さぶる論文集。

定価 九、九〇〇円

宮津大輔著

京焼における芸術性と産業化

―小森忍から民藝、走泥社、そしてニューセラミックスへ

芸術性（陶芸）と産業化（窯業）の拮抗・併存がもたらす製陶の新規性と発展を、複眼的に考察。

定価 七、七〇〇円

鈴木達也著

キセルと喫煙の歴史

―日本への伝来、海外への伝播

[Shibunkaku Works]

4月刊行　**定価 四、四〇〇円**

日本へのキセル伝来には誤説が多くみられる。欧州喫煙史と史料をもとに、オランダ船来航以前に金属パイプが日本へ呈示され、キセルとして定着後に東南アジア・シベリアへ伝播した様相を明示した。

表示価格は税込

細川周平（国際日本文化研究センター名誉教授）著

音曲の近代百年 上・下巻

今夏刊行予定

A5判上製・各四五〇頁（予定）／定価未定

黒船来航から終戦までの約百年、伝来の楽は西洋音楽の衝撃にさらされながら、静かに、しかししたたかに生き延びてきた。本書は「音楽」ではなく、あえて忘れられた言葉「音曲」を掲げ、町人の歌、糸竹の芸、在来の響きが近代国家や国民意識とどう交錯したのかを描き直す。洋高邦低の通史を離れ、現地から近代を聴き返す試み。

〔上巻〕

前　弾
名乗り
第1章　音曲―お座敷、劇場、家庭
一段目　上野体制の支流
第2章　邦楽調査掛―音曲の保存、鑑賞、古典化
第3章　東京音楽学校邦楽科―洋楽の殿堂の片隅で
二段目　国の楽、国の歌
第4章　国楽―建設すべき国と楽
第5章「君が代」―国の賀歌百態

〔下巻〕

三段目　メディア―聴衆を創る
第6章　楽譜―一人の稽古、数人の合奏、無数の記譜法
第7章　レコード―複製技術時代の芸事
第8章　ラジオ―電波と伝統
四段目　和洋の界面―調和と衝突
第9章　ウェスタール論争―日本音楽の発見者、その対話とすれ違い
第10章　和洋調和楽―音曲、洋楽器と出会う
後　弾

並木誠士著

近代日本における「絵画の変」
―洋画の流行からデザインの導入まで

当時の資料を繙きながら近代日本における絵画をめぐる変化の様相を明らかにしてゆく。

定価 七、一五〇円

松本和也著

印象派の超克
―近代日本における西洋美術受容の言説史

西洋美術の新潮流が日本にもたらした文化的衝突、それがしだいに「日本化」され超克されていくさまを明らかにする。

定価 七、七〇〇円

杉山卓史著

「われ感ず、ゆえにわれ在り」の美学
―ドイツ啓蒙主義における「感情」と「感覚」の系譜

「感性の学」として構想された美学の原点に立ち返り、「感情／感触（Gefühl）」と「感覚（Empfindung）」という二つの概念に光を当てる。

定価 八、二五〇円

石川義宗著

シェーカー教徒の思想とデザイン
―祈りの中の家具と建築

最小限のもので築き上げられた村で、シェーカーたちは何を思い、何を生み出したのか。

定価 七、七〇〇円

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

三宅秀和著

狩野光信の研究

6月刊行予定

A5判上製・四〇〇頁(予定)／**予価 一一、〇〇〇円**

狩野光信は、永徳と探幽をつなぐ重要な存在でありながら、その史的位相について十分に明らかにされてはこなかった。没後に「へた右京」などの評言も残る光信であるが、信長・秀吉・家康という三人の天下人の御用をつとめた唯一の狩野家当主であり、やまと絵制作にあたっても指導的地位を確立していた。時の権力者たちの要望に懸命の画業で応えた光信が、徳川の世に遺したものとは何だったのか。本書は、狩野光信の様式とはいかなるものか、それらがいかにして成立し展開したのかを、作品の造形面から検討するとともに、主たる需要者であった豊臣政権との関係から考察し、解明を試みるものである。

【予定目次】

序　章　狩野光信をめぐる二つの評言、「倭画風情軽柔可愛」と「へた右京」
第一章　国立国会図書館所蔵「賦何船連歌」の検討—園城寺勧学院客殿障壁画と関連して
第二章　狩野光信様式の把握—園城寺勧学院客殿一の間の障壁画を中心として
第三章　園城寺勧学院客殿二の間障壁画の検討—「別筆説」と一の間との連関
第四章　狩野光信様式の人物図
第五章　狩野光信様式の源氏物語絵と豊臣政権—狩野光信様式成立契機試論
第六章　細見美術館所蔵「豊公吉野花見図屏風」と文禄三年太閤秀吉の吉野の花見
第七章　近世名所図屏風における吉野と厳島—その組み合わせと豊臣政権との関わりについて
第八章　土佐光吉宛平家絵制作関連書状の再検討
終　章　豊臣・徳川並立期における狩野光信と孝信
結

古画備考研究会編

校訂　原本 古画備考(全5巻)

現代の視点から、美術史成立前夜における江戸の学知の達成を世に問い直す。

定価 七七、〇〇〇円

古画備考研究会編

原本『古画備考』のネットワーク

東京藝術大学附属図書館に所蔵される朝岡興禎自筆の原本『古画備考』を中心に、古画備考研究会が取り組んできた共同研究の成果。

定価 一〇、一二〇円

京都国立博物館編

黄金のとき 桃山絵画

狩野派の画師が活躍した桃山時代の代表的な絵画100点を紙上展観。

定価 四四、〇〇〇円

宇野日出生編／京都府京都文化博物館・京都市歴史資料館企画

京都　実相院門跡

四季の美しさで巷に知られた門跡寺院、実相院の内情についての探求を試みた初の研究書。

定価 二、二〇〇円

表示価格は税込

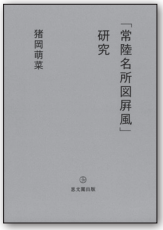
猪岡萌菜（千葉大学助教）著

「常陸名所図屏風」研究【30s】

3月刊行　A5判上製・二三八頁／**定価 九、九〇〇円**

2015年に岩手県で発見された「常陸名所図屏風」（個人蔵、茨城県立歴史館寄託）は、17世紀末頃の常陸国の景観とそこでの風俗を俯瞰的に描いた、他に類例を見ない作品である。江戸前期の常陸国を生き生きと視覚化した本屏風には、現在では失われてしまった風景も含まれており、当時の地域の姿を伝える点でも貴重な資料である。

本書は、この謎多き屏風を単なる名所絵としてではなく、地域内部からのまなざしに応じて制作された史料として捉え、絵画・地誌・紀行文を横断的に分析する。洛中洛外図の系譜に連なるこの作品が、地域社会といかに関わり、どのような視覚体験を提供したのかを探り、美術史上に位置付ける試みである。



【目次】

序章　研究目的と分析視角
第一章　「常陸名所図屏風」の概要
第二章　「常陸名所図屏風」の描写趣向
第三章　水運の表象―「摂津国名所港津図屏風」との比較から
第四章　名所風俗図と絵図・航路図の交錯―絵画表現における地理把握
第五章　「常陸名所図屏風」図様分析《前編》―先行図様の利用
第六章　「常陸名所図屏風」図様分析《後編》―享受者と享受空間の考察
第七章　紀行文『ひたち帯』に見る元禄期常陸国の名所
終章　名所風俗図屏風の系譜―地域に向けたまなざし

鶴岡明美著

実景を描く
―江戸後期風景描写をめぐる知の営み

4月刊行　A5判上製・四二八頁／**定価 一一、〇〇〇円**

写生の技法が向上し、よりリアルな表現が追求された江戸後期、実際の風景を見たままに写しとろうと試みた作品群が遺されている。本書が「実景図」と称して分析するこれらの作例は、時に険しい旅路において描かれたものであり、その描写の背後には、絵師の視点や画風の流行のみならず、公の事業や時の為政者の存在があったはずである。一方で、これら実景図と地理情報を提供する絵図との境界は曖昧であり、美術史学においては個別の作例への言及に留まる傾向にあった。

本書は、実景を描いた作品群の背景にある権力関係を探り、地誌編纂事業や幕府の対外政策といった多彩な視座から読み解くことで、近世の文化の諸領域を横断する知の営みを描き出し、画派という括りでは見えてこなかった近世絵画史の一様相を浮かび上がらせることを試みる。

【目次】

はじめに
第1章　拡散された実景―『扶桑名勝図』ほか
第2章　奉じられた実景―岡岷山「都志見往来日記」・同諸勝図」・谷文晁「熊野舟行図巻」
第3章　企てられた実景―大野文泉「南部下北半島真景図」「津軽外ヶ浜真景図」
第4章　秘匿された実景―『新編武蔵風土記稿』挿図
第5章　開示された実景―『日光山志』
第6章　共有された実景―谷文晁『宮城野聚勝園記』
第7章　追認された実景―目賀田守蔭「蝦夷歴検真図」
第8章　演出された実景―「小笠原島真景図」
おわりに

表示価格は税込

思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

川見典久著

古武器の探究
―一八世紀における刀剣・甲冑調査

12月刊行　A5判上製・三九四頁／**定価 九、九〇〇円**

徳川吉宗は、寺社や大名などが所蔵する由緒ある武器・武具を上覧するとともに、甲冑師らを西国に派遣して古武器を探索させ、その模写を献上させた。刀剣については、本阿弥家に名刀を列挙した『享保名物帳』の提出を命じ、刀鍛冶の全国調査を行い、優れた刀工を江戸へ呼び寄せた。その目的は、古製を知り、新たな武器を制作する際の参考とするためである。このような吉宗の活動の流れを受け、松平定信による古文物調査の図録『集古十種』の編纂、伊勢貞丈らによる武家故実研究の高まりなど、古いものを見直す動きが起こる。本書は、古武器を題材として、近世中期から後期にかけて起こった復古・好古の潮流を検証する古器物考証史の試みである。

藤井譲治編

織豊期主要人物居所集成
〔増補第3版〕

B5判上製・六三〇頁／**定価 八、八〇〇円**

2016年の第2版刊行から、約8年。織豊期の重要人物たちは何時何処で何をしていたのか、数多の研究者が調べ上げ集成した基礎資料を、ついに第3版として大幅アップデート。居所の確定は、従来個々の研究者が、特定の人物、特定の時期に限って行ってきたため不完全で、公にされることもきわめて少なかった。本書は、主要人物の現在知りうる限りの居所の情報を編年でまとめた研究者必携の書！　第3版では従来の25名に加え、新たに松平家忠、徳川秀忠、宇喜多秀家、前田玄以、増田長盛、長束正家、島津義久、島津義弘、立花宗茂の9名を加え、豊臣政権の五奉行・五大老を完備した。

東寺文書研究会編

東寺執行日記
全三巻（第一巻・第二巻　オンデマンド版）

東寺長者系列の寺内の要職である執行（しぎょう）の公務記録。本シリーズではその中世部分を翻刻する。

定価 各一五、四〇〇円

中世史研究会編

日本中世の東西と都鄙
―中世史研究会五〇周年大会論集

東海地域を拠点にし、日本中世史研究の発展に貢献してきた中世史研究会。創立50周年を記念した2年間のシンポジウムの成果。

定価 一一、〇〇〇円

表示価格は税込

伊東史朗著

神像の研究Ⅲ

7月刊行予定

B5判上製・約二九〇頁／**予価 一三、二〇〇円**

神像の歴史を振り返ると、神仏習合現象がその成立に大きくかかわっており、次いで、中世に盛んになる本地垂迹説は神・仏を同一視することによりその複合的形体を生み出した。これまでの神像史においては、記紀神話の神々や祖先神・地域神だけにはとどまらず、奈良時代からの修験道・陰陽道の神々についても言及はされてきた。しかし、従来の研究はその区別をせず、一括して同じ神像として扱ってきた。そのような現状に鑑み、本書では神仏習合・本地垂迹説による神像と、修験道・陰陽道の神像との差を明確にすべく別々の部を設けて、わが国の神像史をひもとく。そのほかに、重要作品についての各個研究、および神像の周辺領域である動物彫刻、仮面、古神宝にも各一部を与える。

【既刊案内】

神像の研究　**定価：一三、二〇〇円**
神像の研究Ⅱ　**定価：一二、一〇〇円**

【予定目次】

各個研究

1 松尾大社の神像―秦氏の祖神と外来神
2 八幡三神像と行教―大安寺八幡宮、薬師寺八幡宮、御調八幡宮

修験道、陰陽道の神像

3 金剛蔵王と蔵王権現（再論）
4 神童寺の修験関係遺品
5 立山神像について
6 日光の銅造三所権現像
7 大将軍八神社の陰陽道神像
8 馬場南遺跡（神雄寺跡）の性格
9 十世紀の神像・肖像

神仏習合と本地垂迹

10 宮寺の形成と本地垂迹思想
11 石清水八幡宮下宮極楽寺旧蔵の阿弥陀如来像
12 長安寺太郎天像と観想
13 大神神社の大黒天像―オホモノヌシ命、大国主命、大黒天
14 〝宇賀弁才天〟と江島
15 市比賣神社の幼児を抱く女神像

動物表現

16 美術史資料としての動物彫刻
17 香川・水主神社の人面師子（一対）と師子狛犬（三対）
18 備中・吉備津神社の師子狛犬―獣表現の中世的展開
19 京都御所清涼殿安置の師子狛犬
20 神馬考―新城・石座神社像を中心に
21 二十八部衆の動物標幟―五部浄居天像をめぐって
22 東寺舎利会と八部衆面

奈良国立博物館編

仏師快慶の研究

現存する快慶全作品（在銘作品42点、重要作品21点）の大判カラー写真を収録した快慶研究の決定版。

定価 七七、〇〇〇円

稲本泰生編

釈迦信仰と美術
―作品解釈の新視点

釈迦イメージの形成・継承・変容の様相を横断的に浮かび上がらせ、新たな研究視点を提示する共同論集。

定価 一三、二〇〇円

表示価格は税込

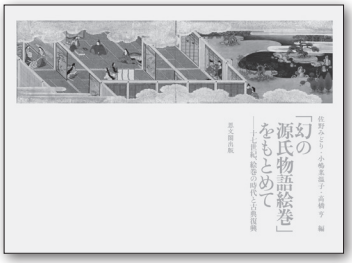
思文閣出版新刊・既刊案内　詳細はwebへ→https://www.shibunkaku.co.jp/

佐野みどり・小嶋菜温子・高橋亨編

「幻の源氏物語絵巻」をもとめて

―十七世紀、絵巻の時代と古典復興

A4判横綴じ函入・五〇四頁／**定価 三八、五〇〇円**



「源氏絵」の歴史のなかでも際立つ個性を有している「幻の源氏物語絵巻」。黄金をふんだんに使用した豪華な造りに加え、他の源氏絵のパターンとは一風変わった場面選択が見られる点でも注目される。現在までに存在が確認されているのは20巻弱、完本で揃っていたとすれば、全体で200巻を超すものであった可能性がある。誰がどのような意図のもとで、このような絵巻を制作しようとしたのか。詞書染筆者の問題も含めて、江戸時代初期の文化史・政治史・経済史的な状況を見渡しての検証が必須となろう。日本文化史のミッシングリンクというべきこの豪華絵巻の謎に、豊富なカラー図版と国文学研究者・日本美術研究者15名の論文でもって迫る。

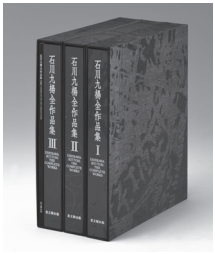
石川九楊著

石川九楊全作品集

ISHIKAWA KYUYOH: THE COMPLETE WORKS

全三冊　附別冊

B4判変型・一二〇〇頁／**定価 二二〇、〇〇〇円**



書家・文学者という二つの側面から、書表現の可能性や日本語の在り方を追求してきた石川九楊（1945～）。本書は1963年から2023年までの間に制作された、現存作品または資料（写真、図版等）により確認可能なすべての作品を収録。「書は、筆と紙の間に生じる接触、摩擦、離脱による「筆蝕（ひっしょく）」のドラマである」ことを見出し、書表現の極限を追求し続ける制作者・石川九楊のすべてを収めた作品集。さらに充実した附録と論考で、その多彩な表現活動と魅力に迫る。（日・中・英語表記）

表示価格は税込

思文閣グループの逸品紹介

美の縁

池田遥邨　行々子

遥邨自身が「行々子」と題している。行々子はオオヨシキリの別名。水辺に生息する夏鳥で、「ギョギョシ」と大きな声で鳴くことからその呼名がついた。

小林一茶の句に「行々子大河はしんと流れけり」と詠んだものがある。鳥の声が響くほど川の流れの静けさが際立つ、悠々とした自然を詠みあげ、どこか哀愁をも感じさせる名句である。

本作では画中に鳥の姿は描かれない。しかし題名と句をふまえて見ると、鳥の鳴き声や、川辺の澄んだ空気が呼び起こされてくるだろう。一茶の句に詠まれた世界が立ち上がるとともに、柔らかな色使いとのどかなタッチからは遥邨独自の大らかな気風も感じられる。画題と画面とが響き合って生まれる、視覚に留まらない鑑賞体験がここにある。

池田遥邨は岡山に生まれ、はじめ洋画を学んだが日本画に転向した。旅を好み、行く先々で膨大な写生に取り組んだという。画風を様々に展開させながら、自分が見たもの、感じたものを大胆な構図で詩情豊かに描き上げた。晩年には種田山頭火の句によせたシリーズを手掛けるなど、俳句をよく好んだ。旅に生き、自分の心を動かした景色を切り取る。絵画にも俳句にも通底した感性があらわれた逸品。

（思文閣編集部・小橋慧子）

思文閣グループ採用情報

随時更新しております。
詳細は下記連絡先へお問い合わせください。

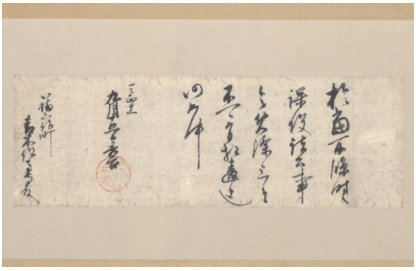
075-531-0001
saiyo2027@shibunkaku.co.jp
https://www.shibunkaku.co.jp/recruit/

思文閣大入札会
LINE 公式アカウント

大入札会に関わる情報発信のほか、
作品コンディション等をお問合せいただく
窓口としてご活用ください。

SHIBUNKAKU
思文閣

思文閣古書資料目録



羽柴秀吉朱印状　1幅

※古典籍を中心に古文書・古写経・絵巻物・古地図・錦絵など、あらゆるジャンルの商品を取り扱っております（年3回程度発行）。

※ご希望の方は、下記、思文閣出版古書部までお問い合わせ下さい。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL（075）752-0005　FAX（075）525-7155
https://www.shibunkaku.co.jp/kosho/
kosho@shibunkaku.co.jp

自費出版のご案内

思文閣出版の自費出版レーベル
「Shibunkaku Works」
思文閣出版が培った学術書制作のノウハウを
活かして、ご研究の書籍化をお手伝いいたします。
詳細は小社までお問い合わせください。

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355
TEL（075）533-6860　FAX（075）531-0009
https://www.shibunkaku.co.jp/publishing/
pub@shibunkaku.co.jp